F-26a-7

文學士白河次郎
國府種德編述

支那學術史綱

東京 博文館藏版

222.01
Ka547s

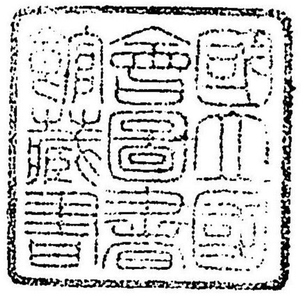
文學士白河次郎
國府種德 編述

支那學術史綱

東京 博文館藏版

慶應義塾藏書

222.01
Ka547A



33368

小引

東大陸三千年の文明を研究せしものの別に支那文明史の著あり、故に其以て、文明史の資料とすべきものは、之を茲に發せず。たゞ單に評論の一資料たらしむるに止めき。

主とするところは、支那三千年來に於ける、學術の變遷に在り、故に宗教、文學、美術の如きは、之を他の宗教史、文學史、美術史に讓り、茲には專ら學術として認むべきものに就いて、其變遷を研究せり。編者の間挾むに、評論を以てせしは、以て讀者をして、其綱要を知らしめんとの微衷に過ぎず。

支那學術の變遷に就ては、世其書に乏し。獨り先輩狩野良知翁の、支那教學史略あるのみ。該書は、文を行るに漢文を以てし、頗る教學に重を置き、學術變遷の大略を叙するに於て、殆んど間然するところなし。然るも之を新しき体裁に改め、方今讀者をして、容易に其大綱を知らしめんには、更に新なる研究を加へて、之を推闡し、然後に之を世に紹介するの要あるを認む。是れ編者が、殊に支那教學史略に本づき、更に新なる研究を加へしめ、其全体を通じて、之れが評論を、各時代に試みし所以なり。支那文明史と相俟て、支那の學術に於ける變遷を知るべきもの、蓋し此書に於て、最も其要を得べきあるを信じて疑はず。

方今支那を研究するもの、一にして足らず。然るも所謂支那研究といふは、單に現今支那の國勢を揣摩するに過ぎずして、剴切に其國の文物制度、地理思想をば、歷史に徵し、科學に問ひ、以て正確なる研究を敢てするものに至ては、寥々として曉天の星の如く然り。是れ編者が、筆硯忙殺の間を偸んで、茲に此書を編述せし所以なり。其編述の粗笨、評論の誤謬の如きは、賴に江湖識者の敎を承けて、他日是正するところあらん。

明治三十三年春杪

編述者鯉洋犀東しるす

支那學術史綱目次

第一編　總論　支那文化の發源地……一

第二編　太古學術の發源……四

第一章　有史時代の學術……四

第二章　易傳の所載、文字の發源……七

第三章　伏羲、神農、黃帝の學術、鳥跡文字の製作……一〇

第四章　堯舜の學術……一五

第三編　夏殷周三代學術の變遷……二一

第一章　夏殷の禹貢洪範……二一

第二章　周代文華の盛開……二六

第三章　周代學者の戰國時代……三一

第四編　秦漢三國兩晉南北朝に於ける學術の變遷……三七

第一章　秦代の坑火……三七
第二章　秦代新文字の改定……四二
第三章　漢代學者の輩出、古文の拾集……四四
第四章　漢代學者の迷想……四九
第五章　漢代に於ける訓詁學及史書編纂……五三
第六章　三國時代文詞の盛行……五四
第七章　晉代學者の懷疑時代……五七
第八章　南朝に於ける梵學採用……五九
第九章　北朝に於ける經術の變遷……六三
第五編　隋唐五代宋遼金に於ける學術の變遷……六七
第一章　隋代の學者及圖讖の嚴禁……六七
第二章　唐代學術の勃興、梵文翻譯の完備……七二
第三章　唐代圖書の整備……七六

第四章　五代學術の衰頽……七八
第五章　宋代學術の革面、性理學の勃興……八一
第六章　宋代性理學派の分爭……八四
第七章　遼金學術の異采……八九
第六編　元明清に於ける學術の變遷……九二
第一章　元代學術の新潮流、歐羅巴學術の流入……九二
第二章　元代に於ける曆數の革新……九八
第三章　元代の醫學及小說戲曲勃興……一〇三
第四章　明代經術の尊尚……一〇七
第五章　明代學者の輩出、道學派の紛爭……一一〇
第六章　明代歐羅巴數曆の譯行……一一四
第七章　明末清初地理考古學の端緒……一一八
第八章　清朝圖書編纂の大事業……一二四

第九章　清朝學者考證學の拘泥……一二七
第十章　清朝飲術の發展……一二九
第十一章　清朝小說戲曲の盛行……一三三

支那學術史綱目次畢

支那學術史綱

文學士　白河次郎
國府種德　編述

東京帝國大學藏書

第一編　總論

支那文化の發源地

世界民族の發生地

支那文化の發源に關して、漢人種が黃河の北岸に蕃殖し、漸く南下して黃河、楊子江間に住せし黃族人種を驅逐し、交化を其地に發展せりといふをば、一般の見解とはなすなり。世界に於ける民族發生の地として、歷史家は、埃及のナイル河地方、メソポタミアのチグリス、ユフラテス兩河地方、印度のインダス河地方、支那の黃河、楊子江地方、及び亞米利加のミスシッピー河地方を算するなり。此の見解よりするも、支那の黃河、楊子江間の陸地には、始めて人類の發生せしものありとは、

何人も是認せざるべからざる所たるに似たり。然れども是れ未だ支那文化の淵源をば、深かく研鑽せざるの結果にして、此の如きは人種學、言語學、古物學上よりして、宋だ精確に支那の古代を研究せざるにより來りし、誤謬たらずんばあらず。

支那民族は、カルジア地方より、パシールに出て、喀什喝爾崑崙を超えて、東方に移住し、遂に其居を黄河の上流に占め、漸く東下して、黄河の彎曲せる北岸に來り、それより更に南下して、黄族を南方に驅逐せし者たるなり。佛人テリアン、ドラグーブリーは、古物學に依り、人類學に資り、又博言學よりして、支那の古代を研究し、支那古代に於ける文學、器物及文化等の諸原素が、多く西亞細亞のカルジア地方の古代、アッシリア、バビルニアの古代に類似する點多きを認めて、神農を彼のサルゴン、即ちセンヌングに比し、黄帝をナイ、ホワングチーに擬し、伏羲即はちフーヒをば、アッシリア、バビルニアの人とし、神農、黄帝よりして、其族パーク民族を率ゐて、支那に移住せし者なりと斷定せり。パーク族とは、百姓を意味し、百姓とは支那民族太古の名稱なりしとせり。

支那民族西亞細亞より移住せりとの臆說

此說や、固より直ちに以て其正鵠を得たるものとすべきかは、尚ほ聊か疑問に屬せざるべからざるところとするも、今日に在りては、支那古代を研究するに於て、此の如く嶄新にして、精緻たるものを得るものを、更に發見するを得ざるのみならず、更に之を否定すべき正確なる說をなすものすら、之れあらざるに於て、先づ之を推して能く支那の古代を說明せしものとせざるを得ず。又支那民族の西亞細亞より來りしをも、こゝに認めざるを得ず。此等は固より江湖の識者と共に更に研究を重ねるの必要あるところたり。

支那學術の研究

支那民族の發源地、支那文化の發源地をば、既に西亞細亞に在りとするも、支那學術の發源、又變遷を研究するに於ては、支那民族に孤立の民族として、其有して傳へし所の載籍により、之を討究するは、最も其當を得たるところたりとせざるべからず。支那の古代を研究すると、其民族の學術を研究するところは、自ら別問題たるべからず。是れ吾輩が、こゝに支那有史時代以下、學術の變遷を論ずるに於て、資料を一に支那固有の載籍に徴する所以なり。

第二編　太古學術の發源

第一章　有史時代の學術

太古學術の淵源

支那文明の淵源は學術に發す。學術は支那文明の三千年間に於ける潮流を通じて、其の汪洋氾濫の流動をなす。然らば則ち支那文明の淵源たる學術は、果して何れの時代より發源したるか、今嘗みに支那に傳ふるところの古書により、太古學術の發源せし史跡に就て、聊か之れが所來を討究するあらん。支那文明のカルジアより輸入せられたると否とは、こゝに暫く措き、こゝには單に支那に傳はる古書の記するところより、西亞細亞と干繫なき孤立せる一民族の太古の文明を研鑽するとして、之れが文明の淵源たる學術の發源に就て、溯流して之れを討究するあらんとはするなり。

支那の古書に據れば、太古には三皇五帝の稱あり、之に關して學者の說をなすところ區々にして一ならず、其の世紀年代に就ても亦皆な明ならずして、支那學者

太古の文籍

は今に至るまで太古を鴻濛の時代として、之れを古物學上の比較研究に於て說明せんともせざるなり。學者の傳ふるところによれば、太古の文籍、三墳五典、八索九丘の書ありといひ、春秋左氏傳には楚の左氏侑相能く之れを讀めりと稱せり。周官にも外史が、三皇五帝の書を掌るといへど、其の書は後世皆な亡失して傳はらず。孔子の書を定むるや、唐虞より以上のものは、之を斷じて刪除せり。蓋し鴻荒蒙昧の世、文敎未だ敗かれず、載籍極めて微にして、所謂墳典索丘なるものも、亦た必らず盡く信じ難きにあらざりしに因り、之を刪除せられしものならん。然るを後世の諸子雜史は、敢て上古の事を傳へ、甚しきに至ては、詳細に之れを記述して、殆んど之れ目りし如くに載するものも少なからざれど、此等は多くは假託寓言に出でしものにして、もと事實の徵すべきなきものとせざるべからず。

姑らく歷代傳ふるところの記錄傳說にして、較信を措くに足るべきものを推して之を稽ふるときは、伏羲氏は、燧人氏に代はりて王となり、之れに繼ぎしものは、神農氏にして、之れに繼ぎしものは、黃帝軒轅氏なりしが如し。蓋し燧人氏は民に火食を敎へしものにして、伏羲氏は民に佃漁を敎へしもの、神農氏は民に稼穡を

太古君主の教傳

教へしものにして、軒轅氏は民に交通を教へしものたるに似たり。歐洲學者が、黃帝を以て其の民族を率ゐて、カルジアより、今の支那土耳斯坦に出で、ヒンヅークシュより、崑崙山脈を超えて、支那に移住せしものとするには、黃帝の交通に於て、彼の指南車の如き器具を發明したる等に見ても、最も信を措くに足るが如きを愚ゆるところたるも、もと載籍の支那に徵すべきものなければ、泰西學者が言語學、古物學上の比較研究より立てし說としては、勿論價値なき說とはいふべからざるなり。

然れども單に之を支那民族が、今に傳ふるところの載籍に就て見るときは、伏羲、神農、黃帝は、黃河の沿岸に、其教化を敷き、人類必需の諸具、諸技を教へしのみに過ぎず。上古の事は、茫々として殆んど捕捉すべきあらずとするも、此時代に於て、此等の諸君主が、其率ゐるところの民族に、諸種人生必需の事物を教へ傳へしめたりしは、事實なり。支那の最古の書として傳へらるゝところの易傳は、此事實を載して、今に之を證明するなり。之を西方亞細亞に於ける、アッシリア、バビルニアの古代研究と共に、比較研究をなす如きは、自ら別問題として、之を支那文明史の研鑽に讓り、支那太古に於て、何れの時代より、所謂支那に於ける學術其のものゝ、核子を植ゑたりしかは、易傳によりて之を證明するに於て、蓋し餘あるところたりとせざるべからず。

伏羲、神農の學術

第二章　易傳の所載、文字の發源

支那に於ては、伏羲以下の君主に關して、其の事蹟の所載に見るべきもの、獨り易傳を批して其の最も古きものとせざるを得ず。易傳には云ふ「古へ包犧氏の天下に主たるや、仰いでは則ち象を天に觀い、俯しては則ち法を地に觀い、鳥獸の文、地の宜とを觀て、近く諸を身に取り、遠く諸を物に取り、是に於て始めて八卦を作り、以て神明の德を通じ、以て萬物の情を類し、結繩を作くりて、罔罟を爲くり、以て佃し以て漁せり。蓋し諸を離に取る。包犧氏沒して神農氏作り、木を斲つて耜となし木を揉めて耒となし、耒耨の利以て天下を教へり。蓋し諸を益に取る。日中に市を爲して天下の民を致たし、天下の貨を聚めて交易して退き、各其の所を得せしむ。蓋し諸を噬嗑に取る。神農氏沒して、黃帝堯舜氏作こり、其の變を通じて、民をし

黃帝、堯舜の學術

て倦まざらしめ、神にして之を化し、民をして之を宜とせしむ。易は窮すれば則ち變じ、變ずれば則ち通じ、通ずれば則ち久し。是を以て天より之を祐け吉にして利ならずといふこと无し。黃帝堯舜、衣裳を垂れて天下治まる。蓋し諸を乾坤に取る。木を刳て舟を爲くり、木を刻りて楫を爲くり、舟楫の利以て通せざるを濟し、遠に致して以て天下を利す。蓋し諸を渙に取る。牛に服し馬に乘り重きを引いて遠きに致し以て天下を利す。蓋し諸を隨に取る。重門擊柝以て暴客を待つは、蓋し諸を豫に取り。木を斷て杵となし、地を堀て臼となし、臼杵の利萬民以て濟するは、蓋し諸を小過に取り、木を弦にして弧となし、木を刻りて矢となし、弧矢の利以て天下を威するは、蓋し諸を睽に取る。上古穴居して野處せしを、後世聖人之に易ふるに窖室を以てし、上棟下宇、以て風雨を待ちしは、蓋し諸を大壯に取る。古の葬者は厚く之れに衣するに薪を以てし、之を中野に葬り、封せず樹せずして、喪期數なかりしを、後世聖人之に易ふるに棺槨を以てせしは、蓋し諸を大過に取る。上古繩を結んで治まりしを、後世聖人之れに易ふるに書契を以てし、百官以て治まり、萬民以て察せしは、蓋し諸を夬に取りしなり』と。

伏羲の八卦

圖象の始、算數の本

是の數章はもと、卦象を古事に配して、易理を贊したるものなれば、事實を傳ふるが爲めに述べしものに非らざりしと雖ども、然るも上世の制作は、此れを措いて、他に考ふべきものなしとせば、學者は固より此れに由りて信を取るの外なきなり。

是れに由て之を觀れば、伏羲が作くりしところの八卦なるものは、果して何たるものなりしぞ。其の西亞細亞に於ける楔形文字の轉化變形せしものにして、其の原形は確かに、楔形なりしといふは、姑らくこゝに之れを論せずして、支那學者の由て以て說をなすところに據りて之を推すに、蓋し當時の文は、結繩の約と竝び行はれしものにして、八卦其のものは、圖象の始めにして、算數の本たるべきものたるに似たり。意ふに當時必らず之を用いて人言を示めし、民用を濟せしものありしならん。果して然らば、文敎の起源、實に此に萌し、敎學の發源、亦た此れより來りしものとせざるべからず。後世學者、其の意を擴充し、寓するに義理を以てし、乃はち又た之れを推衍して、用ひて占筮を爲し、遂に附會して、河圖、洛書、五行、禨祥の說をなすに至りしなり。伏羲の舊軌を去ること遠くして、原始の意義遂に知るべ

からざるに至りぬ。

易が圖象の始にして、算數の本をなせし者たりしは、事實なり。然るも其占筮の書にして、河圖、洛書、五行、禨祥の說に於ける淵源なりといふは、後代學者の謬想に出でたり。易が太古の文字を示し、其卦爻の形狀が、頗るアッシリアの太古文字と、相類似するに於て、之を支那民族の西亞細亞より來れる、有力なる證憑となすと否とは、こゝに姑く之を措き、其一種の形象文字にして、圖象の始をなし、又數を以て思想を表彰せしなり。算數の本をなせしといふ如きは、獨り支那に傳はれる、易の卦爻を見ても、想像し得らるゝところたり。文字の思想が、早く易の卦爻に於て發せしといふは、何人も是認せざるを得ざるところたらん。果して然らば、易の一書、勿論竹書時代以前に於て、伏羲の傳へしまゝに就て之を見るも、其學術を傳へし、唯一の器具たる文字其ものゝ源をなせしといふは、疑ふべからざらん。

形象文字の淵源

第三章　伏羲、神農、黃帝の學術、鳥跡文字の製作

伏羲は罔罟を結んで、民に佃漁を教へ、犧牲を養ふて、庖厨に供せり。儷皮を用いて、嫁娶の禮を爲くれり。是れ能く動物の性を明にせしものたり。神農は耒耜を作くりて、耕稼を教へたり。百草を嘗めて、醫藥を製したり。是れ能く植物の質を辨せしものたり。又た其の人に教へて市をなさしめしは、分業して生業を營むの道に於て、其の基を開きしものなり。支那太古の學術は、此の時既に稍見るべきものあり。民族が此の時早やく轉移時代より牧畜時代を經て、耕作時代に入りしもの以て徵すべきなり。

伏羲、神農の諸學術發源

黃帝軒轅氏に及んでは、舟車を作りて交通を廣うせり。干戈を制して攻守に備へり。元妃西陵氏は始めて蠶繰をなして、衣服を造れり。蒼頡は伏羲の卦畫に本づいて、文字を作れり。隸首は算數を作くり、容成は曆を作くり、伶倫は樂律を作れり。其れ果して是の如しとせば、凡百の制度は、皆な黃帝の時に創められしものなり。然れども世運の進化するは、自ら一定の順序あり、漸を以て文化の發展を見るべきところとせば、此等の諸制度は、たとへ黃帝の如何に神聖にして、諸臣の如何に容智ありしに出でしとするも、擧げて凡百制作の功を一時に收むるは、稍疑なきを得ざるところにして、黃帝より唐虞に至るまでには、其の間少昊、顓頊、帝嚳、堯帝の

黃帝時代の諸學術發源

黃帝諸學術の發源は四亞細亞よりくるとの說

治世もあれば、諸制度の此等數帝に起源せしものも亦た少からざりしと、後世傳を爲くるもの、擧げて諸を黃帝の時代に歸せしものには非ざるか。古を稽ふるもの、此の點に於て斟酌して論ずるところなかるべからず。かくして黃帝は、伏羲、神農時代、索樸の後を承けて、人文稍開らけ、制度稍備はり、其の創設するところ、皆なる後世制度の原をなせしに見なば、支那古代學術の、如何に黃帝に至りて開明となりしやは、固より言を俟つて後に知らざるところにして、歐洲學者の黃帝、ホワンチーは、即ちカルジアのナイ、ホワンチーにして、此等の諸制作は、すべてメソポタミアのバビロニア、アッシリアより輸入し來りしものなりといふの說も、亦た未だ必しも一概に妄誕として排斥すべからざると見るところたり。況んや歐洲學者の古物學、言語學上の支那及びバビロニア、アッスシリアに關する比較研究が、頗る根據ある、正確なる說明を與ふるあるに於てをや。

然れども當時の文明は、既に一定の程度に於て、一大發展をなせしは之れありしとするも、民俗尙ほ淳にして、嗜欲未だ熾ならず、其の營み爲すところ、亦た單に人生必需の具たる衣服飲食、其の他必要欲くべからざる求に應せしに過ぎずして、

物質的必要の事物

祥瑞妖孽

伏羲神農より黃帝に至る間、其の政を布くもの、固より單に民族に、物質的必要の事物を敎へしに過ぎずして、尙ほ未だ心理的敎化を敷くに及ばざりしは、當さに然らざるべからざるところに屬す。是れ後世無爲の化を論じ、神仙の道を說くものゝ、皆な黃帝を稱して、種々物質的奇術の源を啓くものとなす所以なり。夫の伏羲が河圖を觀て八卦を作くり、黃帝が鳳鳴を聽いて律呂を制せしものゝ、若きは、是れ後人が其の制作を神にせんと欲して、乃はち祥瑞の說を以て、之れを附會せしに過ぎず。昔時鳥獸艸木、類に異なるものあれば、或は祥瑞となし、或は妖孽となせしは、何れの古代も之れあるところにして、是れより頌贊の言、規箴の辭起りて、之れを頌歎し若くは之れに戒勵し、以て神の驗となすは、物理未だ明ならざる時代に在りては、臆度して之を言へるものゝ、固より何れの民族に於ても、同一に見るところなり。支那の學者、往々帝王の曆數が、必らず五行に應じ、五行更り王となり、終始して相生ずとの說をなすものあり、伏羲を木德、神農を火德、黃帝を土德とし、歷代帝王、各其の德を以て五行の運に際會して興れりといふに至るも、是れ皆な周秦以後、好事者の造くりしところに係り、固より上世淳朴の時代に於て、之れ

ありしにあらざるは、何人も疑なきところたらん。

夫れ然り、支那古代の學術が、黄帝に至りて著しき發展をなせしは事實なるが如しと雖ども、其の教化や、概して飲食衣服住居等、人生必需の求に應じて、之を教化せしに過ぎざれば、心理的教化は固より得て之れを見るべきにはあらざりしに相違なきも、伏羲が既に八卦を畫し、西亞細亞の楔形文字を作りしものとせば、先づ思想若くは諸種の概念を代表するの符號は造られ、而して黄帝の世に至りて伏羲の卦形に本づいて、蒼頡が鳥跡文字を制せしを見たりとせば、支那文明の淵源たるべき學術に關し、尤も偉大なる干繫を有する支那古文字の源は、既に此の時代に發せしものなりとせざるべからずして、學術の起源實に此に始まりしと謂はざるべからず。

鳥卦の楔形文字

鳥跡文字と楔形文字と

然らば則はち、學術の重要具たる文字に就ては、伏羲の作りし卦形は、誰かに其源をなし、而して黄帝に至りて、漸く大成せらるゝを見たりとせざるべからず。蒼頡が作りし文字として、後世に傳へらるゝ字形を見るときは、所謂鳥跡文字にして、頗る楔形文字に酷似するものたるに於て、伏羲の畫せし八卦其ものゝ形狀も勿論楔形文字類似のものにして、今日に傳ふるところの如き、長方形の形狀にはあらざりしなるべし。然るときは、たとへ蒼頡其人が、直ちにカルデアの楔形文字に模擬し、若しくは之を採用して、支那文字を造爲せしと否とを問はずとも、易の卦形蒼頡の文字、共に楔形文字に類似せしものたりしに相違なかるべし。蒼頡が易卦に本いて文字を制せしを事實とせば、易卦も蒼頡の文字も、共に楔形文字より來りしは事實なるが如し。此の如くにして文字は、支那に造られたり。學術の重要具たる文字は、此の如くにして、始めて支那に於て其整備を見るに及べり。

第四章　堯舜の學術

太古の學術は、堯舜に至りて、更に著大なる發展をなせり。學術に關する萌芽は、此時に發生せり。法制に關する制作は、此の時に創始せられたり。儒教の淵源は、此の時に開かれたり。歴史紀錄は、此の時より書契に徴すべくなりぬ。而して支那人の太古理想國家時代は始まりぬ。

堯舜の何人なりしやに就ては、支那の學者は擧げて之を聖人なりとして尊崇す

支那學者の理想國家時代

聖人時代

る所にして、支那古今、聖人と言へば、先づ首として堯舜を推し、治世を論ずれば、必らず唐虞を擧ぐるところたり。子思は『孔子が堯舜を祖述せしなり』といひ、孟子の性善を說く言必らず堯舜を稱し、韓非が『孔墨俱に堯舜を道ふ』といひ、後世稱して『唐虞の民比屋封ずべし』といふが如き、皆な堯舜時代の善美を稱嘆するにあらざるはなし。堯舜果して爾かく聖人なりしか。尙書には堯の德を擧げて『欽明文思、允恭克讓』と曰ひ、其の功を擧げて『九族既に睦まし、百姓昭明に、黎民於變して時雍ぐ』と曰ひ、孔子亦た『大なる哉堯の君たるや、巍々乎として其れ成功あり、煥乎として其れ文章あり』と曰へり。尙書又た舜の德を擧げて『父頑にして母嚚に象傲れり、克く諧くに孝を以てす』といひ、其の功を擧げて『五典克く從ひ、百揆時れ叙いで、四目を明にし四聰を達し、四罪にして天下咸な服す』といひ、孔子亦た『無爲にして治むるものは其れ舜か』と曰ふ。此れ以て堯舜の時代には、人文既に發展して、人類必需の具悉く備はり、政治の制亦た自ら全うして、以て千古の至治を致せしを知るに足らん。而して物質的の敎化が、漸く此時代よりして、心理的の敎化に關する分子を含むに至りたるは、亦た尙書の載するによりて之を見るを得べし。

心理的學術の發源

君位繼承の際に於ける心理的宣誓の語

尙書の載する所に據れば、堯舜が帝位を授受するの際、相警戒するの語に於て『允に厥の中を執れ』といふを見る。是れ舜禹が帝位授受の際に於て、舜が禹に『人心惟れ危ふく道心惟れ微なり、惟れ精惟れ一、允に厥の中を執れ』といふと俱に、當時君位授受の際に於ける、重要の條件とせられし者にして、後世儒者が之れを以て其の基本とせる、王道主義に於ける、君位繼紹の切要條件と認むるところたりき。『大中至正の道を執りて、以て皇極を建つる』といふの、王道主義の、根本とせらるゝに至りしも、蓋し此の語よりして擴充せられたるものなり。王者が其の最も重すべき、君位繼紹の際に於て、此の如く心理的の訓戒を與うるに至りしもの、たとへ一の儀式として、典禮の莊嚴を裝ふが爲めに、此の宣誓をなせしに過ぎざりしとするも、亦た以て當時既に、物質的敎化の餘蘊なく發展せられて、人類必需の具悉く備はり、更に心理的敎化の必要を感じ、之れを君位繼紹の儀式に於ける、宣誓の語とするに至りたるを知るに足るべし。支那儒者が後世此の語を引いて、儒敎の淵源となす如き意義に於て、當時果して宣誓せられしや否やは、未だ猝かに斷定すべからざるところとするも、然るも堯舜時代に於て、少なくも既に這般心理的敎

訓が君位繼紹式に於ける宣誓の語となりしに見ば、蓋し當時に於ける文明の程度が、如何に發展し居りしかを知るに餘師あるところとすべきなり。

尚書は更らに堯舜の政治を紀せり。是に由て之を觀れば、堯舜の政治は、主として天文、地利、敎化に關して施設するところ多かりしに似たり。堯の君位を蹈するや、彼は首として羲和に命じて『日月星辰を曆象して、敬んで人の時を授け』しめたり。當時鴻荒の太古を隔る、尚は未だ遠からずして、民未だ寒暑早晩の理、緩急の務を知らず。故に堯は先づ羲和氏に命じて、象を觀て曆を頒かち、民をして時を失ふなからしめ、又た測候所を、四方荒裔の地に設けて、考驗を廣うせり。羲仲に命じて、嵎夷に宅して、寅んで出日を賓せしめ、羲叔に命じて、南交に宅して、南訛を平秩せしめ、和仲に命じて、西に宅し、寅人に納日を餞せしめ、和叔に命じて、朔方に宅し朔易を平在せしめしは、皆な天文測候所を司らしめたるものなり。湯々たる洪水の、山を懷み陵に襄ぼるや、堯は地理によつて、水脈を按し、之を海に決開せんとして、之れを鯀に命じたり。治水の大業は、堯の時に成功を見ざりしと雖ども、堯が政治の主要なる事業が、天文地理に於て施設するところ多かりしは以て見るべき

堯舜の政治は學術の起源を示せり

堯代の天文地理に關する學術的發展

なり。是れ太古に於て、夙に學術の發源をなせし始めなり。

舜の治蹟に就ては、尚書亦た之れが大略を紀述す。舜の位を蹈するや、首として璿璣玉衡を察し、以て七政を齊へたり。然る後朝覲巡狩の禮を行へり。其の巡狩するや、東は岱宗に至り、南は南岳に至り、西は西岳に至り、北は北岳に至れり。天文地理に於て重んずるところを見るべし。洪水を治するの大業は、鯀の成功する能はざるところなるを見て、乃はち之れを羽山に殛し、禹を擧げて之れに膺らしめたり。而して禹は遂に龍門を決して、洪水を海に流がし、以て黃河の河身を修築したり。當時に於て、此等の事業が經始せらるゝに至りたるを見なば、既に學術の著しく發展して、以て天文を察して、之を觀測するの渾天機も創作せられ、四岳を巡狩するの地理を知るの方位も知られ、又た更に大なる事業として、黃河の氾濫を治するの大工事を起すの測量術も、不完全ながら、當時に知られたるを推すに足るあらん。此等は皆な後代に於ける、天文曆數地理、水經等、諸學術の端を啓きしものなり。

夫れ然り。故に支那に於ける、諸種學術の淵源は、遠く之を堯舜の時に發せしや知

舜代の天文地理に關する學術的發展

るべきのみ。人口を開いて堯舜といへは、直ちに之を至治の時代、政治の最も善く行はれし時代となすに過ぎざるも、然るも其學術に於て、諸種の系統に、其源泉を與ふること、此の如きに至ては、學術の變遷を研究せんとせしものゝ外、何人もてゝに留意するなきところたらん。尚書載するところの典謨は、勿論以て堯舜禹の時代に於ける、學術の既に諸種の端緒を啓きしを見るに足るところとするも、堯舜時代よりして更に一轉して夏の時代に至りしは、更に天文、曆數、地理、水經等の諸學術に於て、漸く其詳細を致すに及べりしこと、禹貢の載するところによりても、其一斑を知るに於て、蓋し餘師あるところたらん。堯舜時代を以て、單に政治に於て其善美を盡くせし時代よりとのみ思惟する如きは、尚は一を知て二を知らざるものゝ陋見なりとせざるべからず。學術の變遷を研究する者よりして、之を見なば、堯舜の堯舜たる所以は、全く此に在て彼に在らざるを認めざるを得ず。

堯舜時代に對する陋見

第三編　夏殷周三代に於ける學術の變遷

第一章　夏殷の禹貢洪範

夏殷時代は、古書の稽ふべきもの極めて少なく、夏の如きは、歴世十七君を經て、年を得る凡四百三十年なりと雖とも、載籍の傳ふる者完からずして、其の歴史に於ても、禹啓の後、たゝ少康が、其の臣伯靡と、中興を以て顯はせしものと、夏の亡ぶるに方つて、關龍逢が、諫死を以て聞へしとの外、餘は單に歴世君主の名を記せらるゝに過ぎず。當時史官ありて、史筆の記するものなしといふは信ずべからざるところにして、尚書の典謨の如きは、其の虞夏の書と稱せらるゝに見るも、又た其の舜崩じて、禹之れを繼ぎしを書して舜典に「舜陟方して乃はち死す」と記するに見るも、其の夏代の史官によりて作られしは疑ふべからず。殊に彼の禹貢の如きは、確かに夏代の史筆之を記せしものにして、文章典雅、叙事簡明にして、山川田野、物産貢賦、凡そ禹が經始せし九州の事物、一篇に羅織して餘蘊なきに觀なば、夏代

尚書典謨の筆者

禹貢は地理學の淵源なり

既に文章の頗る發達して、史筆亦た其の人ありしを證するに足るべし。

禹貢は實に、後世地理の學を修むるもの、祖て古代州國の制を攷ふるところにして、周官に職方氏ありて、四海の地理を掌り、九州の分國を辨せしものも全く之れに由り、支那に於ける地理學の淵源、寔に此に在りき。禹が國土草昧にして、洪水氾濫せるの日に當り、舟車橇輦に乘じて、水土を周觀し、土に任じて貢を作さしめ以て廣大なる邦土を經始せし足蹟を記する、此の如く明晰的確なるは、固より大手筆に非らずんば能はざるところとすべく、夏代に於ける史筆の發達せし、斷じて疑を容るゝの地なき所たり。然るに其の載籍の後世に傳はるもの、極めて少なくして、後世史家の由て以て當代を攷ふるに由なきは、果して之れを傳へながら、遂に散佚して湮滅に歸せしに由るか。

殷も亦た、歷世二十有九君あり、年を得ること四百九十六祀に及び、其の聞湯の時伊尹あり、又た汝鳩、汝房あり、大戊の時伊涉、臣扈、巫咸あり、祖乙の時巫賢あり、而して盤庚興り、武丁の時傅說、甘盤、祖己の徒あり、殷の亡ぶるに當りてや、微子、微仲、比干、箕子、膠鬲の徒あり、史の傳ふるところ完からずと雖ども、皆な一代の賢者なり

洪範九疇

洪範の所來

しは之れを知るに足る。此の如くにして殷代亦た學術教化の得て稽ふべきなきは、抑も此等諸賢者が、記して之れを傳へず、後世故に由りて之れを考ふべきなきに由るか。此れ信すべからざるところに屬す。彼の伊訓說命の如きは、後世之れを殷代の作とするものあれども、是れ全く古文の僞書に出で、據て以て其の立言を論じ難きものあり、獨り箕子が周の武王に告ぐるに、洪範九疇を以てして、『天の禹に錫ふとところにして、彝倫の叙するとところなり』と曰ひしもの、稍信を置くに足るところに屬し、夏殷二代の學術教化之れに由つて其の一端を推すに足るを見るところなり。

洪範は『天の禹に錫ふとところ』と記せらる。宋の胡翼之は、之れに關して『天洪範を錫ふといふは、帝堯なり錫ひしなり』と曰ひ、世の所謂洛書龜文の說の如きは之れを取らず、是れ見るべきの說なり。顧念ふに『天の錫ふ』は『天の叙いで』『天の秩づる』といふが如く、皆な帝王の爲すところに就て之れを言ふものにして、帝王を稱して天子といふも、亦た天に代はるものなりといふに同じきなり。彼の洛書說の如きは、始めて漢書五行志の劉歆が言に出でゝ、後世喧傳するところに係るものにし

て之れを上世に徵するに、固より其の說なきところたり。易傳には、河圖洛書の語ありと雖ども、固より未だ其の何物を指せしやを詳にせざるところにして後世の洪範を以て之れに擬するは、妄誕に出づるものたり。是れに由りて之れを觀れば、尙書載するところの洪範九疇なるものは、其の唐虞夏殷四代相傳へし大典なりといふに於ては、蓋し疑なきところたらん。

洪範九疇の所載

洪範九疇に於ける疇類を按するに、尙書は記して曰はく、『初め一に曰はく、五行、次き二に曰はく五事を敬用す、次き三に曰はく八政を農用す、次き四に曰はく五紀を協用す、次き五に曰はく皇極を建用す、次き六に曰はく三德を乂用す、次き七に曰はく稽疑を明用す、次き八に曰はく庶徵を念用す、次き九に曰はく五福を嚮用し、六極を威用す』是れなり。今易傳の所謂六府三事によりて之れを比較するに、六府は水火金木土穀にして三事は正德利用厚生是れなり。洪範疇類の五行は方さに六府に當り、皇極及び五事三德は正德に八政五紀稽疑庶徵及び五福六極は六府及び厚生に當る。是に由りて之を觀れば、當時の文化は、主として人類必需の具に就て研究し、日用必要の事物に就て、知識を得るに過ぎずして、學理を論じ、若く

人生必要の智識を授けし教典

學術の萌芽

は文章を習ふ如きは、當時未だ之れを學ぶに及ばざりしに似たり。要するに水火木金土の如き、其の他之れより來る用法の如き、皆な人生必需の事物及び教化ならざるはなく、物質人事に關する教化は、直ちに當時の學術にして、心理に關する學術の如きは、固より當時未だ著しき發達を知ざりしところたりしが如し。人生必需の具、及び之れが用法、幷びに社會を組織するに於て必要なる、人類結合法、及び之れより來れる制度、此等は夏殷時代に於ける、民人の智識思想なりしなり。學術の發達は、夏殷に於て特に之を見るべきあるなし。然るも其教化既に以上の如きあり、而して一轉して周代に至り、著しく文化の花を開くありしとせば、其文化の花が、早く夏殷時代より、養はれしものたりしには、相違なかるべし。周代に至て、爛熟の花を開くに至りしもの、全く夏殷時代に於ける蓄蓄の養はれしにあらずんばあらずとせば、夏殷時代に於ける教化の夙に學術の萌芽を生じ、漸次に發生して、蓄蓄となり、一轉して花蕚となり、大葩となりしものなるや、疑なし。周代の學術を推して、古代に於ける最盛時代を開きしものとなすに於ては、固より夏殷に於ける學術の萌芽をも是認せざるべからず。核子は夙に堯舜時代に扶植せら

れたりき。

第三章　周代文華の盛開

上は堯舜時代に、其核子を扶植せられ、中は夏殷時代に、其萌芽を發し、其蒼蕾を生せしもの、一轉して周代に至て、其爛熟の花を開くに至りしは、是れ堯舜時代より、夏殷時代を經て、周代に至りし、學術の變遷にして、又發展の順序たり。支那古代史に於ける、人文の最も發展せし時代は始れり。

夏殷二代に於ける學術及び其の社會狀態に就ては、既に之れを概論せり。是に於て乎其支那古代史に於て、人文の最も發展せし時代として知らるゝ周代の文化を驗するに於て、之れが學術、及び其社會の影響を及ぼせし學者學說等を、こゝに概言するの必要を見る。殊に周末に於ては、學者雜然として輩出し、各學說を立て、恰かも支那政治史上に、戰國時代を現出せしと同じく、學術史、文學史上に於ても、亦た一の戰國、時代を開きたるの觀あるところたる、周初よりして周末に至るの學術及び學者學說は、殊に學者の研究を値するところたり。

學術史の戰國時代

支那文化の盛なるは、古來周を推して其の甲となす。姬周以前は、時尙は鴻荒の世を隔ること遠からず、諸種の文物製作、未だ草創に屬するを免れざりしが、周に及んでは、夏殷二代の文物製作に鑑みて、各之れを損益折衷して、增減伸縮するところあり、一代の文物典章、是に於て井然として備はり、炳乎として其れ明なり。郁々たる文、周に於て始めて之れを見る。堯舜時代よりして其の萌芽を扶植せられたる文明の樹は、夏殷を經て苔蕾漸く熟し、姬周の初に至り、爛熟として其の香葩を開き、周末に至りて、殆んど千紫萬紅繚亂して應接し、落花地に狼籍して掃ふべからざるに至るの觀ありき。一朝にして嬴秦坑火の厄起り、周末の文學爲めに一空幾んど熄まんとせしが、漢興るに及び、再び爐餘の遺文を收拾して、更に文敎を鼓吹し、其の盛先秦を凌駕せんとするに至り、こゝに秦の先にしては周、秦の後にしては漢、爛熟の花と、紺綠の新樹とは、秦に先後して、文明の光彩を陸離たらしむるに於て、周は諸れを堯舜三代より承けてこゝに大成し、更に諸れを秦を隔てゝ漢に傳へて、其の文華の實を結ばしめたるものとして、文化の盛を其の前後に揖にするものとせざるべからざるを見る。

爛熟の香葩

周の文化は文王より始まり、武王周公に至りて大成せられ、孔孟諸子百家に及んで、其の掉尾の盛運を鼓振せられたり。初め文王は羑里に在り、易を演して開物成務の道を興せり。其の卦辭、蓋し文王之れを作ると云ふ、所謂彖辭是れなり。武王は殷の遺臣箕子に問ふに、洪範九疇の叙するところを以てして、深かく前代の文に鑑みるところありき。而して周公は繼で起り、弘く前代の文物を觀て、こゝに周代郁々の文を經始せり。周代の文物蔚然として茂生するに至りしもの、全く之れを周公の功に歸せざるべからず。

周公の學術

周公は文王武王の遺志を繼いで、禮を制し、樂を作くり、以て一代の典章を定めたり。當時の經籍、多く周公より出でしところたり。所謂六經、皆な周公が之れを校定して、後世に傳へしものに非らざるなし。周禮は亦た周公の作りしところに繫るとして、後世に傳へらる。然れども疑ふべきもの多しとして、支那の學者間にも、既に異說あるところたりと雖ども、其の周代の書たるは疑なきところに應じ、當時の文獻典章を徵すべきもの、頗る多きを見る。學者は周禮に就て其の疑ふべき點の主要なるものを辯して謂ふ。「周公居攝の後にして書成り、豐に歸りて、實は未だ嘗て行ふところあらず、以て他日の用を待ちしなり。故に建都の制は、召誥洛誥と合はず、封國の制は、武成孟子と合はざるなり」と。又た或は說をなして謂ふ。「周禮は周の初に作られたり。東遷に至るまでは、三百餘年、官制の沿革、改典の損益、凡そ幾なるを知らず。而して改易せしの人皆な周公ならざるなり。是に於て後世の法之れに竄入して、其の書遂に錯雜し、增刪の迹遂に稽ふるところなく、總て周公の舊となせしのみ」と。蓋し周禮が周公の作りしところと、其の後代の人に手に成りしの者が、相混同して錯綜蕪雜の書となり、以て後世に傳へられしを爲め、他の周公が作り者と合致せざる點多きを致せしといふは、或は正鵠を得たるの言なるに似たり。且つ周禮の今に傳ふるもの、其の書全からずして、六典には冬官を缺き、又た三公三孤の職を逸するより、晩出の書なりとして、學者往々之れを輕議すれども、然れども是の書に由りて、當代に於ける社會の狀態を按ずるに、當時設官の制、立制の法、井然として整備し、叙述せられ、其の周密固より後代の及ぶべからざるものあるを見るに於て、蓋し思ひ半ばに過ぐるものあらん。

周公の周禮

儀禮も亦た、周公の作るところに屬するが如し。然れども其の書後代に傳はるも

周公の儀禮

周公の算術九數

の、殘闕の餘に出で、完かざるの書にして、當時禮制の全体を知るに足らずと雖ども、然るも尚ほ是の書に由て諸れを稽ふれば、當時の禮制、所謂禮儀三百、威儀三千といひしものゝ規定せらるゝ、其の曲折委詳、此の如きあるに驚かざるを得ざるところなり。算術九數亦た、周公の作くるところとなす。今ゝ周髀算經、九章算術等の書あり、名を周公に假るは、たとへ依託に出づるところとするも、然るも亦た算書の最も古きものとして、後代數學者の祖とするところたるは之あり。其の他諸般の學藝に關する書の、周公によりて作られしもの亦た少なからざりしなるべきも、皆な後世に傳はらず。適ま其の傳はると稱せらるゝものも、多くは依託に出でしものに過ぎざる如きは、時古うして、殊に秦火を經て、古書多く燼餘闕殘の後に出でしに是は、亦た已むを得ざるところたり。周禮の載するところによれば、所謂六藝なるものゝ規定せらるゝを見る。

六藝

五禮　吉　凶　軍　賓　嘉
六樂　雲門　大咸　大部　大夏　大濩　大武
五射　白矢　參連　剡注　襄尺　井儀

五馭　鳴和鑾　逐水曲　過君表　舞交衢　逐禽左
六書　象形　會意　轉註　處事　假借　諧聲
九數　方田　粟米　差分　少廣　商功　均輸　方程　贏　不足　旁要　今は重差、夕桀、勾股

周代學術の整備

又た六儀を載するあり。

六儀　祭祀　賓客　朝廷　喪紀　軍旅　車馬之容

是れ皆な保氏即ち大保小保等が國子に教へしところにして、文王武王も亦ひに學んで、皆な其の道に入り、其の道に達せしと傳へらる。此の如くにして周代の文物典章學術技藝は、著大なる發達をなし、大は官制法制より、小は算數學藝に至り、顯は宗廟の典禮より、微は個人の禮儀に至るまで、井然として整備至らざるなく、粲然として章をなし、炳然として文をなす。周代の文物、美を前代後代に擅にするもの、洵に偶然に非らず。周代の文物典章蔚然として其れ昌なるを見る。

第四章　周代學者の戰國時代

周代に於て、前後學者の輩出せしもの、彬々として其れ饒し。隨て其の書を著はし

説を唱へ、徒を集めて教を立てしもの、殆んど後代に於ても、多く見るを得ざるところたり。姑らく周代を別つて、周初より平王東遷以前に至るまで、及び平王東遷以後より秦に至るまでとなし、其の間に於ける學者の物與、學説の紛起に就て、之れを概見せんか。

周公以外、周初の學者

周初に於ては、武王の所謂「予に亂臣十人あり」といふもの、説者は、之れを周公旦、召公奭、大公望、畢公、榮公、大顛、閎夭、散宜生、南宮适、邑姜なりとするところにして、是れ皆な武王を輔けて、天下の至治をなせしもの、殊に周公が、周の文物典章に於て經始せしところに至ては、後世學者其の右に出づるを得ざるところなること、既に之れを概言せしところの如し。大公望の著はすところ六韜あり、兵法の書なり、是より先き、又た風后が撰するところの握奇經ありといへども、並に僞託に出で信を措き難きものなり。然るも後世の兵法兵術を論ずるものは、皆な之れを祖として尊崇せざるなし。周初には又た史佚ありて、文史を掌りしも、撰著の書、後代に傳はるものなく、鬻熊ありて鬻子を著はせしは、支那に於ける子書の始めにして、史記の楚世家には「熊通曰ふ、吾が先鬻熊は、文王の師なり」といへども、其書の後代に傳ふるものは、後世の假託に出でゝ、眞なるものに非らず。周初の學者皆其の名を存すれども、其の書の後代に傳はるものなきは、當時尚ほ學者物與の時を去る遠くして、天下無爲にして至治を致たし、民人皆な周公の經始せしところを守り、他の言をなすものをして、天下の耳目を動かすを得せしむるの餘地なからしめ、隨て其の書亦た後世に傳へらるゝ程に、尊重せられざりしに由りて然りしにはあらざるか。史の記するところによれば、「成王康王の世、海内安寧にして、刑措いて用ゐざること四十餘年」といへば、たとへ單に其の太平を欲するの言に過ぎざりしとするも、成王康王の際には、教化浹ねく敷かれ、民人穆々として昇平に安んじ、欽んで文王武王周公の制を守つて、別に異説を立つるの學者を見ざりしは、當さに然るべきところたるに似たり。昭王は南巡して返らず、穆王は遊を好んで遠略を務めたりと史は傳ふれども、尚ほ穆王が能く刑辟を修めて甫刑を作くりしを見たり。厲王、幽王は俱に賢ならずして、其の國政を喪ひしも、宣王は其の間に出で賢に任じ能を使ひ、政を修めて中興の功を奏せしを以て、其の臣召虎、方叔、尹吉甫の徒、皆な文武の才を以て、政を内外に輔佐したるを見たり。詩經には仲山甫を始め

周公以後の學者

學者の戰國時代

として、此等諸賢の武功を頌贊するを見ると雖ども、此等は皆な中興の際に起り、力を武事に專らにせしが爲め、文敎に遑あらざりしによるものにして、詩經の雅頌が、單に其の武功を稱するもの丶如き以て徵すべし。然るも此等諸賢が、固より文敎學術に於ても、當時一世に拔きしものありしは、周代文化の盛なるに於て、當さに然らざるべからざるところとにして、一も其の文敎學術に就て傳ふるあるを見ざるは、蓋し武功に是れ急にして、未だ後世に傳ふるに足るの文筆を取るに遑あらざりしに由りて然るべし。

平王東遷の後は、周室式微にして、諸侯漸く周の制を受けざらんとし、周の朝廷亦た見るに足るの文敎あるなく、學者あるなし。孔子の春秋を修めしは、此れより始まれり。史家の春秋時代といふは此れより始まり、春秋より以て戰國に至り、戰國より以て秦に至る、此の間之れを學者勃興の戰國時代とも見るべきものたり。春秋の時、晉の叔向、鄭の子產、吳の季札の如き文敎の君子は、之れあるも、皆な以て文化に關するものならざりしが、孔子は獨り毅然として此の間に立ち、其の天縱の聖を以て、崛起して周公の後を承け學を修めて厥はず、徒を集めて之れを敎へ、た

諸學術の勃興

とへ當時に用ゐられずして終りしも、敎を千載の上に立て丶、道を千載の下に傳へたり。孔子と時を同ふして、老子は起れり。無爲の敎を立て丶、道敎の祖となれり。孔子老子の後、周末諸子紛として並び興れり。老子の敎を傳へしものには關尹子、列子、莊子、楊子、愼到、田駢、接子、環淵の徒あり、皆書を著はして各其道とするところに就て學說を立てたり。其他墨子には節用の敎あり、李悝には地力を盡すの說あり、公孫龍には堅白同異の辯あり、鄒衍の徒には談天の學あり、申子、韓子には刑名法術の論あり、孫子には兵法の言あり、醫和、扁鵲には醫病の術あり、師曠、師襄は樂律に於て、梓愼、卜偃、裨竈は天文に於て、屈原、宋玉は辭賦に於て、公輸、魯般は機巧に於て、更に子華子、尹文子、鬼谷子、歇冠子、亢倉子、於陵子、劉折子の徒と、各其見るところを以て說を立て、其の得るところに從ふて書を著し、或は其國に顯れて名を得、或は其の徒に傳へて敎を爲すあり、文學道藝、律法方術に於て、諸家紛然として一時に勃興崛起して、周末の文化爲めに蔚然として一代の盛をなせり。此の間に立て其道最も正大にして、其敎最も盛に、天下百世の德敎を垂れて、支那三千年、道學の淵源を開きしものは、獨り孔子の敎に於て之れを見る。孔子の弟子三千人、盛な

孔子の學術

らずとせず。而して孔門七十子の徒は、各孔子の教を受けて、散じて諸侯の間に遊び、大なるものは其の師傅卿相として政に參し、小なるものは士大夫を友として、教を傳へり。子路は衛に居り、子張は陳に居り、澹臺子羽は楚に居り、子夏は西河に居り、子貢は齊に終はれり。彼の田子方、段干木、吳起、禽滑釐の如きは、皆業を子夏の徒に受けて、王者の師となりしものなりき。戰國分爭して、干戈相踵ぎ、七國唯だ富國强兵の術、合從連衡の策を講ずるにこれ急に、凡て儒術を迂遠陳套、用ふるに足らずとして、之れを黜けしと雖ども、齊魯の間、學者の此の教を傳へしものは、依然として變せず、孔子の教は益盛なるを致しぬ。孟子荀卿の徒は、孔子の教に遵ふて、各其の說を潤色し、道學を以て當世の宗となれり。殊に孟子の如きは、仁義王道を以て、戰國諸王の間に遊說し、堂々として王者の經綸を論じ、經世濟民の道を教へ、毅然として、王道を以て天下の亂を廓清せんとするの概ありしも、其說當世に容れられずして終り、遂に王道明らかならずして、六國秦の併呑するところとなり、帝政をして爾來二千年、支那の政体たらしむるの基を開くに至りしは、千古の大痛恨事たりとす。孟子の後、鄒魯の儒生は、尙ほ盛に孔孟の教を奉じ、固く守り

孟子の學術

て屈せず、秦の始皇が帝政に抗して、王道を唱へたりしは、聊か人意を快にするところたりき。此の如くにして、六經の學は、儒教の精髓として、師弟相傳承し、以て遙かに秦を隔てゝ、西漢に於ける、一經學門の學を啓くの淵源をなせり。

第四編　秦漢三國晉南北朝に於ける學術の變遷

第一章　秦代の坑火

學說の大打擊

周末諸子百家、紛然として勃興し、學說の戰國時代を形成せしもの、秦が政治上、六國を亡ぼし、天下を統一せし結果、凡ての學說は、君主の威力を以て壓服せられ、言論の自由は剝奪せられ、學說の主張は嚴禁せられ、支那文明に於ける知識の發展は、戰勝者の威力を以て、武力の爲めに蹂躪せられ、法制の爲めに桎梏せられて、一大打擊を受けたり。殊に周末に至り、諸子百家の學說、四分五裂、統一するところなき間に立て、王道仁義を唱へ、周初文王武王周公等が、政治上及び教化上に

採用せし主義に基ける儒教の學說は、最も始皇が創設せし、帝政主義より來れる、君主專制政治と、相衝突せざるべからざるものたりしが故に、支那學者の所謂文學の厄なるものは、秦が帝政の制を樹てし第一着に於ける一大事件とはなれり。書は火せられ、儒は坑にせられ、凡て言論學說を以て、始皇が創設せし帝政の制に、妨害すと認められしものは、悉く嚴罰に處せられたり。是れより學說言論の力は、全く帝政主義の壓服するところとなり。政治上に於ける言論の力は、全く挫折し、君主專制政治の基礎は立てられ、之れに反して、學者の勢力は、再び君主の命令に對して、反抗し得ざる極めて微力のものとなれり。社會組織の狀況は、こゝに一變して統治組織始めて大成せられ、君主臣民の權力干繫は確定せられ、自由民權の分子を含める凡ての學說、及び之れを主張せし學者の勢力は、是れより隱れて社會の內面を支配するに過ぎずなりぬ。

言論自由の剝奪

秦はもと、武力を以て國を立てしが故に、他の六國と其趣を異にし、全く學者の敎を立てしを見ず。穆公に至り、周末諸侯の覇者となりしも、單に武力に依りしものなりき。孝公に至り、商鞅の議を用ゐ、法令を定めて、武力の外に、更に法律の力を藉りて、單に統治權の集中にこれ務め、未だ文學を勸め、學說を貴ぶの必要を感せざりしが、秦以外の諸國に於ては、正に諸氏百家の學說勃興せし際なりしを以て、始皇の時に至りては、亦諸國の風潮に支配せられざるを得ずして、呂不韋は魏の信陵君、趙の平原君等に倣ふて、諸國より賓客文士を招き致し、八覽、六論、十二紀凡そ二十餘万言を著し、天地萬物古今の事を備へりと稱し、號して呂氏春秋と云ふに至れり。荀卿の門人李斯は、其の舍人となりて進用せられき。始皇が帝と稱するに及んでは、博士七十人あり、政を議するに與りしといへば、始皇の初め、亦學者を用ゐしを見るべし。然れども始皇は、既に極端なる中央集權制を取り、君主專制政治の基礎を立てたれば、學者の王道を唱へ、若しくは、他の學說言論を主張するものは、治安に妨害なきを得ずして、此に李斯の建議により、遂に令を下して、史官秦記にあらざるものを藏し、若しく博士の官職にあらずして、敢て詩書百家の語を藏するものあらば、悉く守尉に詣て、雜て之れを燒かしめ、敢て詩書を偶語するあらば、棄市し、古を以て今を非とする者は族し、吏見知して擧げざれば同罪となし、令下て三十日、燒かずんば黥して城旦となすと命じ、燒かざるものは、醫藥卜筮種

呂氏春秋

焚書の命令

樹の書、若し法令を學ばんとするものは、吏を以て師となさしめり。此の如くにして書は燒かれたり。學說は禁せられたり。候生盧生等、始皇の尊賜を受けながら、相共に始皇を譏議して逃げ去りしに及んで、始皇大に怒り嚴命を下して、諸生の咸陽に在るものを廉問せしめ、禁を犯す者四百六十餘人を擧げて、之れを咸陽に坑にせり。此の如くにして、學者は虐待せられ、言論の自由は剝奪せられたり。此の如くにして、一方に統治權の確定を見ると同時に、他の一方には、社會の秩序安寧を妨害するとして、凡て帝政と相容れざる學說及び學者の勢力は、全然根柢より打壞せられたり。

坑儒の快擧

然れども秦が書を燒き儒を坑にしたりといふは、治安に妨害ありと認めたるものを焚坑したるに止り、後世の學者等が云ふ如く、古代よりの文籍、悉く此時に至りて燒亡し、周末の學者悉く殲滅せしにはあらざりしなり。史の載するところに據れば、其の燒きしといふは、民間藏するところの書に在り、博士の藏せしところは燒れざりしなり。其坑にせしといふも、禁を犯せしものに限り、禁を犯かさゞりしものは、坑にせられざりしなり。天下の書は悉く燒かれず、天下の學者は悉く死せざりしなり。

書悉く焚かず儒悉く坑にせず

魯の儒生

漢の高祖が、關中に入りし時、蕭何は咸陽に入り、先づ秦の圖書を收めたりといへば、漢の時、遺書往々世に出でたるを見るべし。其の殘缺あるは、年代を經る久しきが爲めにして、猶ほ漢唐の書と雖ども、今に至りては散亡を免れざるが如きなり。醫藥種樹の書の如きは、當時燒れざりしも、今に存せざるを見れば、燒かれざりし書と雖ども、皆散亡して今に傳はらざりし者たるに相違なし。漢の高祖が、項羽を亡して後、魯を圍ひや、魯の儒生等は、尙ほ講誦して禮樂を習ひ、絃歌の聲絕えざりしといへば、當時尙ほ遺書遺儒の喪失せざりしものの之れありしを見るべし。支那學者の、秦の時を以て、天下の書を悉く燒かれ、天下の學者悉く殺されたりとなすは誤れり。然れども學者學說の勢力が、秦の時を以て、其根柢に一大打擊を加へられたるは之れありしなり。一の學者の崛起して、其學說を主張するなかりしのみならず、武力に反抗せしものは、獨り兵力に依れる、革命者ありしのみなりしは、以て如何に學者學說の勢力が、根柢に於て一大打擊を受けて、再び起つ能はざるに至りしやを知るに足らん。學者の理想の如きは、悉く武力、權力を以て壓服せられ、亦之を盡いて其學說を立つるの餘地あらざるに至りき。此點に於

ては、學者の一大災厄を受しは、事實なり。詩書の厄といふは、遠く當らず。

第二章　秦代新文字の改定

篆文時代

太古伏羲氏八卦を畫して、楔形文字の簡單なるものを傳へてより、黄帝の時に至り、蒼頡は鳥跡文字を造くり、塑刀を以て字を竹簡に刻せしが、所謂竹書時代は、茲に開始せられて、孔氏古文の、所謂壁中書、蝌蚪文の起源をなし、夏殷周の三代を經るも、其文字は改められずして、使用せられたりき。周の宣王の時に及んで、史氏出でゝ大篆を作くり、大篆は變體して、秦の小篆となり、大篆、小篆共に參用せられて、秦初に盛なりき。故に周の宣王以後を名けて、假りに篆文時代とやいはん。大篆は今日に存して、人之を篆文として、認むるところたるも、所謂小篆は、漢の八分にして、後の所謂隷書たるなり。秦代に改定せる新文字は、稱して隷書といふも、決して漢の八分にはあらずして、今の所謂楷書是れなりしなり。是れ確かに文字に於ける、一大變革なりしなり。

秦の始皇の時、李斯は蒼頡篇を作くれり。趙高は爰歴篇を作くれり。胡毋敬は博學篇を作くれり。皆史氏の大篆に取りて、稍其字形を省き、頗る其字體を改めたりき。是れ即ち小篆にして、大篆の大に變革せられしもの。漢の八分にして、今の所謂隷書なるものなりき。大篆文字の變革せられて、こゝに小篆即はち隷書の造くられしは、是れ既に文字に於ける、一大變遷なりき。佶倔聱牙なる文字が、稍其の複雜迂曲、使用に不便なる字体を改められて、多少簡易にして使用し易き文字となりしは、既に以て文字使用上に、一新時期を開きしものにして、隨て其の學術の進歩を助くに、少なからざる影響を與ふるの源をなせしものとすべきところたりき。其の所謂小篆即はち隷書は、秦代に於て、更に一大變革を經たりき。小篆は變じて隷書は造られき。小篆即はち今の隷書は、隷書即はち漢の楷書となりぬ。是に於て乎、支那文字の最新にして、最も簡易なる字體は造らるゝに至りぬ。秦代には、法令峻嚴にして、官獄極めて多事なりしが故に、文書を以て事を奏するも、亦極めて繁劇なりき。文書の用極めて繁劇にして、用ふるところの文字、尚は篆字を以てすゝたとへ大篆に比して、其字體稍簡なりしと雖ども、小篆、今の所謂隷書は、尚は其複雜にして、使用に不便なるを免れざりしなり。是に於て乎、字體省畧の必要は起りぬ。

小篆文字の改定

秦の隸書漢の楷書製作

御史程邈は、始めて隸書即はち今の楷書の字体を創作して、之を徒隸に施さしめたり。唐以前の楷書、唐以後の眞書は、此の時より始りぬ。其の隸書と名けしものは、徒隸に施こして用ゐしが故にして、後世隸書を以て、今の楷書眞書に非らず、秦代の小篆、漢代の八分と同一のものなりと誤解するに至りしは、宋の歐陽修が、其の集古錄に於て、誤つて八分を以て隸書となせしより出でたり。秦代の隸書は、決して小篆、八分にはあらざりしなり。純然たる後代の楷書、眞書なりしなり。

篆字を變革して、楷書を作りしは、秦代に於ける學術史上の一新時期を開始するの一大事件とすべきものたり。是れよりして現今使用の文字は創作せられ、漢以後、楷行草八分の體は開かれ、圖書使用の文字としては、一般に秦代の新文字たる、楷書、眞書を使用するに至りしなり。

第三章　漢代學者の輩出、古文の拾集

秦は既に書を焚き、儒を坑にせり。たとへ夏殷周三代以來の文籍、悉く其燒棄する所とならず、當時の博士が、依然として先秦の載籍を傳へしは之れありしとする

魯の遺儒

も、學者學說が、秦の爲めに一大打擊を受けて、殆んど再び起つべからざるに至りしは事實なりき。圖書の散亡は之れありしも、載籍の所傳は依然たり。學者學說の、更に其時を得て勃興すべきや、期して待つべかりしなり。

漢は秦が書を燒き儒を坑にしたる後を承けて起れり。殊に秦末の亂、楚漢の戰を經て、圖書は散亡し、天下文事を知らず、學者學說、一時其跡を絕ちしが如き觀ありしも、山東省の一角、魯の諸儒は、尙ほ周末の學說を傳へ、陳涉の始めて王となるや、一歲ならずして亡びしと雖ども、秦が學者に一大打擊を加へたりし暴擧を怨みし魯の諸儒等は、直に禮器を負ふて之れに赴けり。然れども高祖が全く海內を定めしに至るまでは、學者が一つも其勢力を得るものの之れあらざりき。高祖と雖ども、初め學者を喜ばず、「乃公馬上天下を得たり、安んぞ詩書を事とせんや」と曰ひ、僅かに叔孫通が、王者の禮を講ずるに及んで、始めて學者の政治に利あることを知りしに過ぎざりき。史の記するところに依れば、叔孫通は魯の諸生を徵して、彼等が周末より傳へ來りしところにより、共に朝儀を起し定めしなり。孝惠に至りて、始めて挾書の律を除きしも、當時の公卿は、皆武力の功臣なりしが故に、未だ文事

孝武學術の尊尚

を尚ぶに至らざりき。孝文は、周末の學說を採用するに勉めしも、黃老刑名の說を好み、孝景は孝文の後を受けて、稍文敎を興せしも、未だ學者を任用するところあらざりき。孝武に至りて賢良、方正、文學の士を招き、公孫弘は布衣より擢んでられて、丞相に至り、人始めて學者を重んずるを知り、こゝに獻書の路は開かれ、寫書の官は置かれ、六經諸子、百家の著書、秘府に充つるに至れり。成帝の時に及んで、秘藏の書頗る散亡せしかば、陳農をして遺書を天下に求めしめ、劉向に詔して、經傳諸子詩賦を校せしめ、任宏をして兵書を校せしめ、尹咸をして數術を校せしめ、李柱國をして方技を校せしめ、一書成る毎に、劉向は其篇目を條し、其の指意を採し、錄して之れを奏せり。劉向死して、哀帝向が子劉歆をして、父の業を繼がしめ、歆は群書を總て若して七畧を作れり。輯畧六藝畧、諸子畧、詩賦畧、兵書畧、數術畧、方技畧、凡そ三萬三千九十卷ありしも、王莽の亂に燒失せり。

光武が漢を中興してより、篤く文學を尚び、明帝章帝も、其後を繼ぎ、經術を重じ、學者を招きしかば、四方より學者は、書帙を負ふて至りしもの、項背相望み、踵を相接し、石室蘭臺には、經籍充滿して、堆積するに至れり。又東觀仁壽閣に於て、新書を集め、班固、博毅等をして之れを典らしめ、竝に劉歆が七畧によりて、書の部門を分ち、班固は之れを編んで、漢書藝文志を作れり。此の如くにして君主が、其臣に命じ、若しくば學者が、君主の助けを得て作りし書は、當時に於ける重要の文獻なりしも、漢季に及んで、董卓が都を遷すに際し、吏民擾亂して、圖書縑帛、皆武人の爲めに取られ、甚しきは、之れを以て帷囊を作る者あるに至れり。王允が圖書を收めて西せし時、車に載する十乘ありしも、道路に艱難して、其半を捨てたりといへば、當時圖書の散亡せしも、多かりしなり。其の剩餘せしものも、漢季長安の亂に、一時焚蕩して、大半は泯滅したり。

後漢圖書の整備

古文の拾集、古經の解釋

漢代に學者の興りしもの、亦頗る見るべきものあり。然れども當時の學者は、秦が圖書を燒きし後を承けしが故に、殘經を遺老に問ひ、斷簡を壁中に求め、唯だ古文を集むるに之れ急にして、學術の研究をなすに暇なく、徒らに文字の解釋にのみ力を費し、學者は一定の釋義を傳へて、各一つの家法を爲し、之れを守ること嚴にして、傳ふるもの別に新研究を爲さず、新識見を立てずして、唯だ家法を明辨するを以て、學となし、經を治むるに、家法を守らざるものは、世の信ずるところとなら

ざるに至れり。是れ漢代の學者が學說を立つること能はずして、凡て周代の學者に及ばざるを致せる所以の一大理由にして、後世の學者が舊を守り古に拘はるの習をなし、一つの新なる研究、一つの新なる識見に於て、一機軸を出すものなきに至りしもの、全く漢代學者の遺習を承けしものにあらざるはなし。

兩漢學者の專修

然れども兩漢の學者は、其の專習せしところに就て之れを見なば、固とより見るべきもの亦少なからざりき。蕭何は秦の圖書を收めて、律令を修めり。叔孫通は魯の諸生を招きて、禮儀を定めり。張蒼は章程に於て、洛下閎は曆數に於て、各貢獻するところあり。蓋公曹參は、黃老を修めり。賈誼鼂錯は、刑名を學べり。司馬遷、班固は、史書を著はせり。董仲舒、揚雄は、經術を傳へり。劉向、王充は、博物を創めり。馬融、鄭玄は、訓詁の學を開き、張仲景は醫術の方を承け、張衡は機巧の技を起せり。其の他六經の學に就き、各一經を專門として修め、師弟相授受して、其の業を世々にせしもの、易に於ては淄川の田生より始まり、書に於ては濟南の伏生より來り、詩に於ては魯に申培公あり、齊に轅固生あり、燕に韓嬰あり、禮に於ては魯に高堂生あり、春秋に於ては齊に胡毋生あり、趙に董仲舒あり、五經博士の制を立てゝ後は、易には

一經專門の學

先秦學術の傳承

田何、孟喜、梁丘賀、京房の學あり、書には歐陽生、夏侯勝、夏侯建の學あり、詩には轅固生、申培公、韓嬰、毛公の學あり、禮には戴德、戴聖の學あり、春秋には嚴彭祖、顏安樂の學あり、六經の各一經に就て專修せしもの、殊に漢代に於て其の盛なるを見し所にして、もと漢は周末を去ること遠からず、各學者の傳承せしところも、尙は未だ其の系統を失はず、概して淵源する所ありしが故に、彼等は秦火の後を受け、唯周末の傳はりしところを守つて、之れを或は失墜せんことを恐れたりし結果は、勿論古に拘はり舊を守るの陋習を成さしむるに至りしと雖ども、其の後世學者をして、能く周代以前よりの文物制度に關し、其の梗概を知るを得るあらしめしもの、亦た漢代諸學者の功たらずとせじ。

第四章　漢代學者の迷想

秦が未だ焚かざりし、先秦の文籍、秦が未だ坑にせざりし、片隅の儒生は、漢代に至りて、其學術を傳へ、未だ多く周代を隔らざりしが爲め、傳承せしところ、皆甚だしき岐徑に陷らず、各相分科して、前代の遺經を修致するに暇め、後代をして由て以

て先秦學術の大綱を傳へて、甚しき誤謬あらざるを得せしめたりしは、全く漢代諸學者の、著大なる功績なりしとせざるべからざるも、然かも著しき學術の進歩は、却て著しき迷想の爲めに、其前路を掩蔽せられ、著しく進歩せし學術も、之れが爲めに一大障礙を受け、却て學者の多く之れに誤らるゝあるを致たせり。陰陽五行の說、讖緯禍福の言、是れ寔に漢代學者の、純正なる學術思想をして、多くの汚點を點せしめたる、一大迷想なりしなり。然るも學術勃興の功は、之を以て沒すべきにはあらじ。

學術進歩の一大障礙

漢代學術の勃興は、勿論著しかりしなり。たゝ夫れ當代に於て、尤も學術の進歩に壅蔽を與へたりしもの、陰陽五行の說讖緯禍福の言は、當時の學者を惑溺せしめ、當代の人心を迷誤せしめたる饒く、延ひて後世の學者を惑はすもの少なからざりしなり。たとい讖緯の說は、漢代已に桓譚張衡等の諸學者ありて、之を排斥したりし爲め、漢以後に至りては、次第に其の勢力を失ひたりしと雖ども、五行の說に至ては、頗る當時學者の尊崇するところとなり、傳へて今日に至るも、未だ此の說を信ずるものを絕たざるは、漢代學者の罪ならずとせず、もと五行庶徵は、洪範の

讖緯の目、五行の說

陰陽五行說の勢力

載するところ、其の端を啓くものありしといふも、當時載するところは單に民の日用に便せしにんが爲めに出でしものに過ぎずして、勿論一の學說をなせしにはあらざりしなり。然るを漢代の學者は、之れを推衍して誇張の言をなし、五行を以て、萬物の根元、物質の原素となすに至り、支那學術研究の進歩に於て、千古萬古、來として拔くべからざる誤謬註愆の根蔕を、扶植蔓衍せしめたり。支那學術の爾牢幾十年、遂に一種の迷信を脫する能はずして、物理哲理の、精明純粹なる發達をなし得ざりしもの、漢代學者、蓋し其の端を啓きしものたらずんばあらじ。

哲理と物理とを問はず、凡べて純正なる學理の研究に、一大障礙を與へしは、此等迷想の一大陰霧是れなりしに相違なし。支那學者の多數が、後代に至りしも、尙ほ純正なる哲理を尊尙するに於て、殊に物理の學者に於て、毫も進歩發達せる學術思想を有せざること、今猶ほ古の如きあるを致せるもの、全く漢代諸學者が傳へし、此等迷想の爲めに、今に支配せられつゝあるものたらずんばあらず。晉代に學者懷抱時代を馴致せしものも、恐らくは此等迷想の極端に走りて、凡ての學理を破壞するに至りしものなりしならん。

學理研究の一大障礙

第五章　漢代に於ける訓詁學及史書編纂

學術の勃興と共に、陰陽五行の說、讖緯禍福の言が、其勢力を逞うするに至りしは、寔に漢代に於ける學術進歩の上に、一大汚點を加へたるものなることは、更に言を要せざるところとするも、漢代學者の、上、先秦の文籍を傳承して、下、後代學術の正經を誤らざらしめたりしは、事實なりき。

漢代の學者に就て、殊に注意すべきは、訓詁學者と、史書編纂者と是れなり。訓詁は、東漢に至て盛んにして、之れが學者には、許愼、賈逵、服虔、何休、馬融、鄭玄あり、鄭玄尤も精博なりと稱せられき。鄭玄は馬融に淵源せり、融は左氏春秋を訓せんとして、賈逵、鄭衆の注を見い敢て加へず、但だ三傳異同說を著はし、其の他孝經、論語、詩、易、三禮、尙書、列女傳、老子、淮南子、離騷を注せり。鄭玄が注せしところは、周易、尙書、毛詩、儀禮、禮記、論語、孝經、尙書大傳、仲候乾象曆あり、又た天文七政論、魯禮禘祫義、六藝論、毛詩譜等を著はし、許愼が五經異議を駁し、臨孝存が周禮難に答ふる、凡百そ萬餘言あり。

訓詁學の勃興

史書に至ては、其の見るべきもの、實に漢代に始まり、司馬遷が、紀傳體を創めて史記を作り、之れに繼て班固父子が、漢書を編せしより源を發せり。支那の史書に就ては、世の傳ふるところによれば、黃帝の世、始めて史官を立て、蒼頡、沮誦、其の職に居り、夏商に至つて、乃はち左右兩史を分置し、言は左史之れを書し、事は右史之れを書せり。周官には、太史、小史、內史、外史、御史の五官あり、三代既に史官の制具備し、夏には太史終あり、殷には太史雘あり、周には太史佚、太史儋、太史叔服、史氏、史蘇、史趙あり、齊に太史南史あり、晉に太史蒯狐あり、楚に左史倚相あり、皆史を以て名あり。左傳には周志を稱し、國語は鄭志を稱し、孟子は晉乘、楚檮杌、魯春秋と稱す、皆な史書の名なり。孔子は魯史に因つて、筆削して春秋を作り、左氏之れが傳を作り、其の事蹟を詳にせり。是れ史と稱すべきものゝ、支那に於ける變遷なれども、其の史として見るべきに至りしは、全く司馬遷が紀傳體を創めて史記を作くり、上は軒轅に始まり、下は漢代に終り、百代史家の典型を爲くりしに繇らずんばあらず。班固父子、之れに繼いで漢書を爲くり、元を高祖に起こし、孝平王莽の誅に終るも、亦た固より遷の史記と俱に、支那史家の魁たらずんばあらず。訓詁の學、史書の

史書の起源

史記、漢書の編纂

著、是れ實に漢代に於ける、學術の殊に見るべきものにして、又た支那三千年、學術の變遷に於ける、一時代をなすに足るものたり。上は先秦時代に於ける、學術の一たび秦の坑火に頓挫を來せし後を承け、下は三國以下五胡の亂を經て、隋唐學術の勃興に於ける淵源をなせしもの、實に前後兩漢の時代に在りしなり。

第六章　三國時代文詞の盛行

漢季の喪亂以來、干戈寧日なく、群雄其間に崛起して、學術の盛、亦兩漢の隆時には及ばざりしも、三國の時代は、尚ほ後漢文教を尚びし餘を承けて、文詞の學は、戰時なかばに、往々にして見るに足るものあり。たゞ夫れ學術に至りては、殆んど寂寥觀るに足るものなかりしのみならず、戰役の餘暇、時に文詞に於て學ぶところありしに過ぎざりし結果は、全く學術を尊ぶの風を喪失し、竟に西晉時代に於ける、清談虛無の說を開くに至るの原由をなせしに見なば、三國時代は、蓋し漢代に於ける、訓詁學、史學の隆興に對する反動として、學者懷疑時代を開かんとする、過渡時代をなせしものたるに似たり。晉代の懷疑時代は、全く三國時代より淵源せ

過渡時代に於ける

り。

三國の世に至りては、蜀、魏、吳相鼎峙して分爭し、漢季の亂を受けて、戰事に之れ追おらざりしも、當時人才の勃興、一時の盛を致たし、隨つて戰亂の間、亦た學者、若しくは文事を修むるもの、之れなくんばあらざりき。之れを君主に見なば、劉備、曹操、孫權、皆な文教を尚ぶを知り、之れを助くるに蜀の諸葛孔明、魏の荀文若、吳の陸伯言等を以てし、殊に孔明の如きは、兵法に於て、諸葛氏集目錄二十四篇ありき。陳壽の錄するところに繫るも、其の書傳はらず。今の傳うるところの兵書、心書、將苑の類の如きは、名を孔明に託せしものに過ぎざるも、其の戰陣の際に、著書ありしは疑ふべからず。其の他學者としては、蜀に譙周あり、吳に虞翻ありし外、聞ゆるもの少なしと雖とも、魏に在ては、其の國直ちに漢の故都に據り、漢代の文獻を傳へしが故に、魏武父子俱に詞藻を善くし、曹植の如きは、名を詞賦に得たり。之れに次いで孔融、陳琳、王粲、徐幹、阮氏、應楊劉楨七子の徒起りしも、皆な文詞を以て一時文華を開きしに過ぎずして、其の學術を修めずして、文詞に馳せたるの習は、一變して晉代に於ける、清談者流の源を開くに至れり。獨り魏の王肅は、賈逵、馬融の學を

孔明の著書

魏朝文詞の盛行

王弼の經學

武器裝飾の具

善くし、鄭玄を取らず、同異を采會して、尚書、詩、論語、二禮、左氏解を爲くり、及び父朗が作りし易傳を撰せり。孔子家語の名は、漢志に見ゆるも、其の書久しく散佚せり。世以て肅が依託して作れるものとなすところたり。王弼又た易及び老子を注せしも、早卒して他の著述なかりき。三國時代に於ける學者の一班此の如きあり。

是に由て之を觀れば、三國時代に於ける學者は、魏の王肅一輩を除く外、蜀の諸葛孔明が、兵法に於て諸種の著書あり、又政治に於て其學ぶところを實行し、能く其事業を擧げたる如きあるに過ぎずして、其の他諸學者、擧げて皆文詞を修めて、武器の裝飾をなし、戰鬪の餘技となせしまでに止り、亦一系統を立つるに足る如き、學術の研究をなすに遑あらざりしなり。殊に人心の漸く、漢代に於ける訓詁學及史學の勃興に厭ふの傾向ありしが上に、戰爭の爲めに學術研究の餘暇を得ざりしことゝて、爾かく學術を尊尚せざるの風を馴致し、僅かに文詞を兵馬倥偬の間に弄して、以て文教を衒ふに甘んじたりしなり。系統を立て、秩序をなすに足る如き學術の纒綴をなすに至ては、當時學者の迂として預らざりしところたりしが故に、其僅かに文詞を餘暇に弄するを以て甘んせしものは、竟に一轉して西晉時代に於ける學者懷疑の時代を馴致し、古來凡ての學說は、悉く懷疑の中に投入せらるゝに至りたり。

放言清談の風習

第七章　晉代學者の懷疑時代

晉の初武帝の魏に承けて蹲祚するや、學校を立て、既に大學生三千人ありしもの、太始八年には、大學生七千餘人あるに至り、咸寧二年、國子學を起すの盛を見しが、當時荀顗は制度を以て、鄭冲は儒術を以て、張華は博物を以て、劉寔は禮法を以て、文獻を振作し、其の盛一時觀るべきものありしも、既に蜀吳を平定してより、國家無事にして、武帝宴樂に縱侈し、上下輕奢を以て風をなし、士大夫擧げて老莊の學を宗として禮法を輕んじ縱酒昏酣して放達を尚び、玄理を放談して、清談を事とし、時俗一變せり。惠帝元康元年、學官を制立して、猥雜多きの弊を矯めんとせしも、惠帝以後は、內には王家の骨肉相殘するあり、外には羌胡鮮卑の內地に據るあり、擾亂相踵き、愍帝に至り、遂に出て、漢に降り、西晉の文獻地に墜ちたりき。東晉成帝の咸康三年、袁瓌馮懷の請により、大學を立てしも、士大夫尚ほ老莊を尚んで、儒

術は振はず、穆帝より孝武に至り、學政を振作せんとせしも、老莊を習ふ士大夫は、偏安の東晋を助けて、文運を隆ならしむるに至らざりき。

晋代の學者は、如何にして爾かく虛誕を尙んで、文運の隆を扶翊せざりしや、蓋し漢季師說を恪守し、一經專修の業を治めし反動として、學者は單に文詞の末に走り、又た訓詁の學を守るを好まず、是に於て乎、學者の崇尙するところ、一時其の趣を異にするを致せしなり、初め何晏等、老莊を祖述して論を立て、無を以て本となすとの學說を主張せしなり、王衍の徒皆な之れを愛重し、是れより朝廷の士大夫も、擧げて浮誕を以て美となし、事務を弛廢して顧みざるを致せしが、裴頠起りて、崇有論を著はし、以て無を本とするの學說を駁せしと雖ども、習俗已に成り、顏が論亦た顧みるものなかりき。晋代名士の世に顯はるゝもの、山濤、王導、卞壼、溫嶠、陶侃、謝安、謝玄あり、卞壼、陶侃は、滔々たる時流に逆つて、之れを救はんとせしも、皆な其の功を奏するに及ばざりき。晋代の學者にして、著書立論を以て後世に傳ふるもの、杜預の左氏傳集解あり、皇甫謐の帝王世紀諸書あり、傅玄が傅子を著はし、陳壽が三國志を編み、陶潛が詩賦に於て、阮瞻阮修が無鬼論に於て、沙門道安が佛說

虛無論

晋代學者の著書立論

に於て、各文運の貢獻なすものありしも、晋代の學者概して寂寥の觀ありし所なりき。

三國文詞を弄するの外、學術研究に遑あらざりし後を承けし晋代は、內は人心益誕を尙び、老莊を假りて其の放縱を遂うし、外は五胡の雜種闖入して、紛擾に虛日なかりしより、學者擧げて漢代に於ける、訓詁及史學の如き、一系統をなせる學術研究をなすの迂なるを思ひ、古來所傳の學說を擧げて、之を懷疑の中に投じ、虛無の論こゝに一大勢力を得て、固有の學術をば悉く、懷疑を以て破壞し畢り、更に印度より流入せる佛敎の所說を迎へて、梵文の翻譯盛んに行はるゝに至り、以て南北朝の梁齊に於ける如き、佛敎の興隆を見るを致さしめたり。

學者の懷疑

第八章　南朝に於ける梵學の採用

南北朝時代に於て、南朝は寧しろ佛敎の興隆を以て、其特色とすべく、北朝は、後魏の經術奬勵を以て、其傾向を知るべきところとするも、其殊に注意すべきは、南朝の梁に於ける、梵學の採用是れなり。梵文の翻譯は、早く晋代より盛なりしも、其學

術の採用に至りては、全く梁代より始まりしとせざるべからず。是れ實に支那學術に、印度哲學の一大系統を輸入せし、第一着の嚆矢にして、支那學術史中、殊に特筆大書すべき時期たるなり。

宋、南齊の學者

今南朝に就て之れを見るときは、宋の武帝が、晉の禪を受けて帝となるや國學を創むるの議ありしも、未だ就らずして殂し、文帝の元嘉十五年、儒學館を北郊に立て、雷次宗をして之れに居らしめ、十六年何尚之に命じて玄學を立て、何承天には史學を立て、謝元には文學を立てしめ、文運一時勃興して觀るべきものあり。臧燾、徐廣、傅隆、裴松之、並びに儒學を以て名あり。謝靈運、顏延之、並びに文章を以て名あり。南齊に在ては、齊の高帝建元四年、國子學を建て、張緒を國子祭酒となせしも、帝殂し國哀を以て國子學を罷め、武帝永明三年、復た之れを立て、王儉國子祭酒となれり。儉は禮學及び春秋々以て學說を立て、儒術の盛一時觀るべきものありき。たゞ夫れ當時國運永からず、隨て學者の敎槌を取るも十年なる能はず、文運爲めに盛なるを得ずして止みき。而して梵文の翻譯は、既に盛となりぬ。

梁に至ては、武帝の天監四年、詔して五館を開き、國學を建て、五經博士各一人を置て敎授し、明山賓、陸璉、沈峻、嚴植之、賀瑒を以て博士に補せしめ、學生を選んで、會稽雲門山に就き、業を廬江の何胤に受けしめ、七年武帝親ら、先師先聖を釋奠し、昭明太子蕭統又た才學の士を引納し、東宮書幾三萬卷ありき。文運の盛なる、晉宋以來未だ此の如きあらざりしといふ。又禁法度に命じて、梁律二十卷、令三十卷を爲らしめて之れを頒行せり。武帝晚年佛法を崇び、政治を事とせざりしが爲め、王侯益橫にして、士大夫競ふて玄理を談ずるに至り、終に侯景の難を援ふ能はざるを致せり。而して佛敎は益盛なりき。元帝又た文籍を愛し玄談を好み、兼ねて書畫に工なりしも、魏兵來寇するに方て、尙ほ圍城中に書を講じて、君臣詩を唱和し、遂に古今圖書十四萬卷を焚いて降りし如きは、寧しろ當時の社會が、文事に力を用ゐ、武備を修めざりし狀態を推見すべきところたり。」

梁の學術尊尙と佛法隆興

梁代に於て殊に注意すべきは、聲韻の學なり。武帝の時、沈約四聲譜を撰びしもの是れなり。聲韻の學は、支那學者の傳ふるところによれば、西域に發りし者にして、漢の明帝の時、佛と俱に同じく支那に入りしものなりしも、文字互ひに異なりしが爲めに、行はれざりしといへば、梵文の發音學が、當時早く支那に入りしは以て

印度梵學の流入

見るべきなり。晉の太始の初、沙門竺曇摩羅察は、光讚般若經を譯して、始めて四十一字母を傳へしより、後、諸僧の譯するところ、互ひに異同ありしといふは、四庫全書總目の載するところたり。切韻の學の如きは、漢より以前には、人の未だ識らざりしところにして、西域より來り、晉代より採用せられし者にて、沈約が四聲を撰みし如きも、全く諸れを梵文及び佛書より得て採用せしといふは、蓋し事實とすべきに似たり。陳に至ては、武帝の業を創むるや、時喪亂を經て、寇賊未だ寧かならず、文教未だ遑あらざりし所なりしが、文帝に及び、儒術を崇尚し、天嘉以後には、學官を置きしも、學者の名を後世に傳へしものなく、梁代の遺儒僅かに、梁代の文獻を傳へ守りしに過ぎざりしが如し。

梵學採用

南朝に於ける、歴代學術の奬勵は、たとへ之れなきはなかりしと雖ども、其盛は單に梁の武帝治世の間に止まりて、餘は更に見るに足るものあらざりしこと此の如し。然るも其梵學採用に於て、梁代より殊に一新時期を開始したりしに至ては、寔に支那學術の潮流に、一種の新なる一大流を合流せしむるの門戸を開きしものにして、隋唐以後、宋儒の學說に於て、印度哲學の分子を含蓄すること多きを致せし淵源は、早く此の時に始まりしものたりしなり。梵文の飜譯は、固より晉代より其の盛を致せしと雖も、印度の學術を採用するに至りしは、梁の韻學より始まりき。此の點に於ては、南北朝時代は、殊に印度學術輸入の第一期をなせるものとして、深く學者の研究を要する時代たることを注意せざるを得ず。聲韻の學の如きが、全く梵文より摸擬せられて、後代韻學の源をなせし如きも、支那言語學研究の上に於て、學者の殊に注意を要せざるべからざるところたるのみならず、印度學術輸入の權輿として、又之を重要視すべきところたり。

印度學術採用の第一期

第九章　北朝に於ける經術の隆興

北朝に就て之れを見なば、魏に於ては、道武初め中原を定め、國事多端にして、文教に暇あらざりしも、始めて都邑を立つるや、先づ大學を立て、五經博士を置きたりしが、大武に至り、盧元、高允を徵し、大學を起し、儒術大に興りしも、大武は又道教を尚び、崔浩の薦めにより、道士寇謙之を信じて、天師道場を起せしも、獻文に至りて、學制益備はり、都を洛邑に遷すに及んで、國子大學を立てぬ。孝文は篤く墳籍を好

魏獻文、孝文、宣武の經術尊尚

みしを以て、劉芳、李彪等は經書を以て、崔光、邢巒の徒は文吏を以て進み、其餘、典章に涉獵し、詞翰に嫻習せしもの、皆好爵を以て迎られ、斯文翽然として起れり。宣武に至り、學制尚ほ未だ全からざりしも、經術は爾顯はれ、燕齊趙魏の間、經を櫝へ著錄せしもの、勝げて數ふべからざりき。正光三年、國學に釋奠し、祭酒崔光に命じて、孝經を講せしめ、文運頗る隆興せしが、孝昌の後に及んで、海內淆亂して、四方の諸學、存するもの幾もなきに至りしを、永熙中復國學に釋奠し、又顯陽殿に於て、祭酒劉廞に詔して、孝經を講せしめ、李郁には禮記を說かしめ、盧景宣には大戴禮の夏小正篇を講せしめたり。都を鄴に遷して後、興和武定の間、儒學復稍盛なりき。

魏の孝文の文敎

魏に於ける學者の蠹出は頗る多からざりしも、魏晉より隋に至るまで、殆んど四百年、南には宋、齊、梁、陳の迭に興るあり、北には魏及び齊、周の交も替るありしと雖ども、其間學者の稍見るべきものありしは、獨り魏の孝文の時代に於て之れを見しのみ。其の規模、漢唐の大には及ばざりしと雖ども、而も文敎の粲然たりしは、蓋し之れありしなり。漢の世、鄭玄並に衆經註解を爲り、服虔、何休、各說くところあり、鄭の易詩書禮論語孝經、服の左氏春秋、何の公羊傳、大に黃河以北に行はれ、王肅の易も、亦間ま行はれしが、晉の世には、杜預は左氏を注し、預が玄孫垣が弟驥、並に其家學を傳へしより、齊の世には多く之れを習ひしが、魏の末に至りては、徐遵明起りて、遂に後齊周隋に於ける經學の一派を開けり。其他學者の蠹出を見ざりしは、全く其の規模の大ならざりしに依りしものか。」

經學派

北齊に於ては、國學の博士は、徒らに虛名を有するのみにして、學生は唯だ員に充ち、國子の一學生徒數十人に過ぎざりき。士流及び豪富の家は、學事に關せず、周郡の學生は、官人の驅使するところとなり、皆遊惰にして檢治せざりき。是れ皆當時の君主が、學事を賞勵せざりしに依るものにして、君主は獨り佛敎を重んじ、甚だしきは道士に勅して、剃髮して沙門たらしめ、從はざりしもの四人を殺せしを致せり。是れより齊の境、亦道士なきに至れりといふ。學術の盛ならざりしは、佛敎を崇ぶに之れ過あらざりしが故なりしか。周に於ては、太祖經術を好み、周官を行はんと欲して、蘇綽に命じ、專ら其事を掌らしめしも、幾ならずして綽卒せしかば、盧辯に命じて、之れを大成せしめ、周禮に依て六官を建て、朝儀を撰び、車服器用、悉く之れに依りて、漢魏の法を革め、後世に損益するところありき。太祖又、晉季以來、文

北齊の佛敎

こゝ古學と二派のこと

章浮華の俗をなすを患ひ、魏帝の廟を祭るに因て、大訟を爲らしめ、其の文尚書典謨の体に倣ひしより、一時士大夫の制作を一變せしめたりき。武帝保定三年、于謹を三老となし、學者を優待せしも、文教は未だ大に盛ならずして止みき。佛道二教を斷じて、諸淫祀を禁じ、儒教を崇尚せしと雖ども、文運の盛なりしは、遂に魏の孝文の時に及ばざりしなり。要するに南北朝の時代に在ては、獨り北朝に於ける、魏の孝文の治政を以て、學術最も盛にして、學者の輩出も亦最も多かりし時なりしとせざるを得ず。

南北朝時代の特色

要するに南北朝時代に於ては、晉末五胡の亂後を承けて、學術の勃興、固より未だ上は漢代、下は唐時の盛には及ばざりしと雖ども、南朝に於ける、梁武帝の時、切韻の學起りて、梵學の輸入漸く盛となり、以て唐代に於ける梵文飜譯の盛を致すの因をなし、北朝に於ける魏の孝文の時、學者輩出して、經術漸く世に尊尚せらるゝに至り、以て下、唐時に於ける儒學勃興の源をなせしもの、是れ寔に南北朝時代の特色として、學術史上に一期をなせしものとせざるべからず。印度文體の輸入は、たとへ遠く源を漢の明帝の時に發し、梵文飜譯は、早く晉代に之れありしとするも、佛教の興隆と共に、梵學採用の第一着をなすに至りしもの、全く梁の武帝の時なり、其端を啓き、以て隋を經て唐に至り、支那學者の直に之を飜譯するに至るを致せしものなりき。

晉末南北朝の混亂せる文化

第五編　隋唐五代宋遼金に於ける學術の變遷

第一章　隋代の學者、及圖讖の嚴禁

晉末五胡の亂より、支那の社會は擾亂を極はめ、雜種の民族は、入りて漢人種と雜居し、支那固有の文化は、彼等雜種民族の攪亂するところとなり、政治の主權が、其の所在を變ずるの頻繁なる、又た其の主權の及ぶ範疇の、各一地方に限られたるよりして、全体を通じて、文運の發展が、其の歩調を同うして進むを見るに及ばず、異りたる文化は、異りたる文化と、相交叉錯綜して、未だ一定の方針に向つて、文化の進路を猛前するに至らず、隨つて文運の展開、其の著しきを見ずして畢りし

が、隋起りて南北兩朝を合し、支那本部の地を統一するに及んで、漸く支那漢人種の文化に、一定の模型を與へ、繼いで唐起りて、大に文運を鼓吹するに及ては、文物燦然として蔚興し、前古後代を曠うするの奎運を開始するに至りたり。五胡の亂より、南北朝を經て隋に至るまで、風霜氷雪の壓するところとなりし花氣は、唐に至つて一時に其の千紫萬紅の、撩亂たる偉觀を呈することを致せり。

隋の文帝が、南北朝を合して、支那本部を統一し、京師都邑悉く交通の便を開き、學校の制を立てしより、隋代の文運は、五胡の亂、南北朝の爭を經て、漸く其の發展の端緒を開けり。煬帝位に即くに及んで、盛んに庠序國子郡縣の學を開かしめ、儒生を徵辟せしも、當時舊儒多く已に凋亡し、たゞ劉焯、劉炫二人、學術に於て頗る貢献するところありき。劉焯が九章算術、周髀、七曜曆書十餘部、日月を推步するの經、山海を量度するの術、其の秘奥を窮めざるなく、又稽極曆書、五經述義を著はすありき。劉炫は論語述義、春秋攻昧、五經正名、孝經述議、春秋述議、尚書述議、毛詩述議、注詩序、算術を著はせり。然るも隋末の亂、外は侵伐を事として、戎馬息まず、盜賊群起して、學者往々溝壑に轉死し、劉炫の如きは、凍餒して死しき。

劉焯、劉炫の著書

隋書傳ふるところろなきも、隋末更に大家ありき。王通是れなり。古に倣ふて、六經を作くり、又た中說を爲つて、論語に擬し、孔子の事蹟を摸擬するに於て至らざるなく、門人私謚して文中子と曰へり。四庫全書總目によるに、中說十篇、其の書事實相牴牾する多し。蓋し其の子、福郊、福時等、遺言を纂述して、虛しく相夸飾し、依託するところありしに出でし如し。然れども大旨甚だ理に悖らざりき。但だ字句皆な論語を剽襲せしは、標榜も亦た甚しとなす。元經十卷、亦た舊本には、隋の王適撰と題すれども、唐志には載錄するあらず、乃はち阮逸が家より出でしなり。然れども晉末以來、徒を集めて學を講ずるの盛は、寔に王通より始まりしものにして、蓋し隋代に於ける掉尾の一鼓振をせしもの、之れを王通に推さゝるを得ず。唐代學者の氣風實に王通に由來せり。

文中子の中說

隋代に於て、尤も注意すべきは、讖緯の禁止と佛敎の隆興となり。佛敎は別に支那宗敎史として其變遷を論ずべきものとして茲に之を措き、こゝには單に讖緯に就て一言せん。讖緯は、圖讖緯侯の書にして、卜筮の流裔に出で、鬼神を信ずるものを說きしところたり。其の說周季に起り、秦を經て盛んに、漢の哀帝平帝の間に行

讖緯書の變遷

はれ、王莽之れに藉つて、篡奪の資となすに至りしが、光武興るに及んでも、亦た厚く此の說を信ぜり。隋志の載するところによれば、其の說の變遷亦た一班を窺ふに足るものあり。「說者は云ふ、孔子既に六經を叙して、天人の道を明かにし、別に緯及び讖を立てゝ來世に遺せりと。其の書は前漢に出で、河圖九篇、洛書六篇あり、黃帝より周の文王に至り、受くるところの本文、又た別に三十篇あり、初め起つてより孔子に至たり、九聖の增演して、其の意を廣うせしところ又七經緯三十六篇あり、孔子作くるところ、前を併せて合して八十一篇あり、又尙書中候、洛罪級、五行傳、詩推度、災氾曆樞合神務、孝經勾命決、援神契、雜讖等の書あり。漢代には鄭氏表氏の說あり、漢末には鄭崩の圖緯讖雜占を集めて春秋災異五十篇を爲くるあり。宋均鄭玄の並びに讖緯の注を爲くるありき。王莽は符命を好み、光武は圖讖を以て興り、遂に盛んに世に行はれ、漢の時、又た東平王蒼に詔して、五經の章句を正し、皆な命して讖に從はしめり。是れより俗學者擧けて五經を言ふに、讖を以て說をなせり。孔安國、毛公、王璜、賈逵の徒、之れを妖妄となせしより、漢の魯恭王、河間獻王が得、せしところの古文に因て、參考して義をなし、爲めに古學の一派を開くに至りし

圖讖の妄誕

より、此の說一時行はれず、魏代王肅、古學を引推して其義を難じ、王弼、杜預、從て之れを明にして、古學稍立つに至り、宋の大明中、始めて圖讖を禁じ、梁の天監以後は、更に之れが禁を嚴にせしが、隋に至りて、圖讖の禁益嚴にして、煬帝の位に即くや、乃はち使を發して四出せしめ、遍ねく海內の書籍、讖諱と相涉れるものを搜し、悉く之を焚かしめ、更の糾するところとなりしもの、死に至れり。」是れより復た、此學說を唱ふるものなきに至れり。然れども學說として讖諱は、其の迹を絕ちしも、其の說は依然として支那千年の後に傳へらるゝなり。隋代に於て讖諱の說の禁せられしは、其の文運に貢獻するところ大なりし、尤も較著なる功績の存するところにして、唐代に於ける文學の絢爛を致たす所以の淵源をなせしもの、此の一大禁令、確かに與つて力ありしところたらずんばあらじ。

學者懷疑の學風は、漢季に起りて、晉代に成り、一方には陰陽五行の說、讖緯禍福の言、其勢力を逞うし、他の一方には妄誕の極端に走りて、凡ての學說を打壞して、悉く之を虛無に歸せしむるの懷疑學者、益其勢力を逞うし、南北朝を經て、其影響するところ、尙は學術進歩の一大障礙として存せしに、端なくも、此學術進歩を、いた

圖讖の厄運

學者の迷想打破

く阻礙せし一大迷想の、忽ち一大打擊を受けて、禁令の力を以て制せらるゝに至り一方に迷想を學者に剝取せしと共に、一方に懷疑學者の思想をば、一洗し去りて、こゝに始めて唐代に於ける學術勃興の一大起因をなせしもの、是れ特に隋代に於て、文獻の爲めに多とすべきところたり。

第二章　唐代學術の勃興、梵文翻譯の完備

上は漢代學術の盛を紹ぎ、下は宋時儒學隆興の因を開きしもの、是れ唐代の特色とし見るべきところにして、學術の盛に於ては、前後其比を見ざるところたり。

唐興つてより七年、隋末の亂、僭して王と稱せし者皆亡び、高祖初めて州縣鄉の學を置き周公孔子の廟を國學に立て、親ら釋奠を行ひしより、太宗に及び、意を文學に鋭うして、其秦王たりし時、既に文學館を開いて、學術の士を延きしかば、杜如晦、房玄齡、虞世南、諸亮、姚志廉、李玄道、蔡允恭、薛元敬、顏相時、蘇勗、干志寧、蘇世長、薛收、李守素、陸德明、孔穎達、蓋文達、許敬宗、所謂十八學士あり、能く魏晉以來、陵夷せる學敎を振作して、唐代三百年の文運を啓けり。玄宗亦た文學を尙びしも、天寶の亂後は、

十八學士

學校衰廢して觀るに足るものなく、代宗は國子監を興せしも、宦者魚朝恩を以て監事を判せしめ、爾後歷世、竟に太宗時代の如き盛運を見るべからずして止みしも、其の間學者の彬々として蔚出せしもの踵を絕たざりしは、蓋し太宗之れが基を植せるの、深うして大なりしに由れり。』

唐代の學者は、魏晉以降、學術の陵夷して、久しく振はざりしを觀、經術を崇尙して、文藝を砥礪し、君主亦た之れを奬勵して、其の基を立てしなり、碩學巨匠、蔚然として勃興し、學術文章、前古後代に獨步するに足るものあるを致せしなり、唐代に於ては、獨り學術の盛を極めしのみならず、諸宗敎も、亦た大に興り、佛敎最も盛にして、經論の飜譯備らざるなきに至り、後世佛敎宗派の分立、皆な源を唐時に發せざるなきを致たせしもの、亦た皆な文運の盛を極めしに由らずんばあらじ。』

唐代に於て學者の摟指すべきもの、一々枚擧に遑あらず。たゝ其の主要なるものを擧ぐれば、其の朝に仕つて賢相と稱せられしもの、房玄齡、杜如晦、魏徵、王珪、姚崇、宋璟等の如きありしも、此等は學者を以て見るよりも、寧しろ名臣として傳ふべきものにして、獨り陸贄に至ては、學問淵博、識見純正、其の論諫數十百篇、時弊を譏

唐朝第一人

唐代の文章詩賦

陳し、後世の法とすべく、文章德業、洵に唐朝の第一人たりき。其の他文學の士に至ては、陸德明、顏師古、孔穎達の訓詁に於ける、韓愈、柳宗元の文章に於ける、李淳風、僧一行の曆算に於ける、杜甫、李白の歌詩に於ける、三藏玄奘の譯經に於ける、皆な嘖古の大家を以て之れを見るべし。」

殊に文章詩賦に於ては、唐書文藝傳によれば、「唐三百年文章三變せり。高祖太宗は、大難始めて夷ぎ、江左の餘風に沿ふて、綺句繪章、揣合して低卬し、王楊は之れが伯たり。玄宗經術を好み、群臣稍彫琢を厭ひ、理致を索めて、雅を崇び浮を黜ぞけ、氣益雄渾となり、燕許其の宗を擅にせり。是の時唐興つて已に百年、諸儒爭ふて自ら家に名け、大曆正元の間、美才輩出して、道眞を擂磨し、聖涯に涵泳せり。是に於て韓愈之れを唱へ、柳宗元、李翺、皇甫湜等之れに和して、百家を排逐し、法度森嚴にして、晉魏を抵轢し、上は漢周に軋り、唐の文完然として、一王の法をなせり。侍從酬奉の若きには、李嶠、宋之問、沈佺期、王維あり、制冊には常衮、楊炎、陸贄、權德輿、王仲舒、李德裕あり、詩には杜甫、李白、元稹、白居易、劉禹錫あり、譎怪には李賀、杜牧、李商隱あり、皆な卓然として所長を以て一世に冠たり。故に後世文を言ふものは韓柳を以て規と

韓柳李杜、

曆の大家

梵文飜譯の完備

なし、詩を言ふものは李杜を以て矩とす。」唐代文運の盛寔に古を驚うして後に絕せりとすべし。

唐代に於て、殊に注意すべきは、曆と佛教と是れなり。曆に於ては、前に李淳風あり、大史局に直して、渾天儀を制し、法象書七篇を著はし、後には僧一行あり、周易大衍の曆を推算して、開元大衍曆經を撰せし是れなり。佛教に於ては、梵文飜譯の盛、殆んと前後未だあらざるところたるを致し、僧玄奘は、從來飜譯の誤謬多きを病とし、貞觀の初、商人に隨て印度に入り、廣く異本を求めて參驗し、外に居ること十七年、百餘國を經て、悉く其語を學び、西域記十二卷を撰し、歸朝の後、弘福寺に在り、梵本六百五十七部を飜譯し、房玄齡、許敬宗の助を得て整比し、凡そ七十五部を成し、梵文飜譯の完備、是に至て燦として光彩を放つに至りたりき。印度學術の輸入、蓋し此の時より盛なるはあらざりき。唐代學術の盛、獨り儒術の勃興のみにはあらざるなり。曆の改定、梵文飜譯の完備、寔に唐詩文獻の精華とすべきあり。

第三章　唐代圖書の整備

唐代に於ける圖書の整備に就て之れを見るも。亦た當時文運の盛なりし一斑を味ふに難からず。凡そ經籍、漢より以來、史官其の名氏篇第を列して、六藝九種七略となせしもの、唐に至り、始めて分つて四類となし、經、史、子、集の區別をなすに至れり。開元に及んでや、其の著錄せられしもの、五萬三千九百十五卷あり、唐の學者が著書に係るもの、又た二萬八千四百六十九卷あり、併せて八萬二千三百八十四卷、唐代に於ける、藏書の盛なりし、以て見るべきなり。初め隋の嘉則殿、書三十七萬卷あり、武德の初めに至り、書八萬ありしが、重複相糅せり。王世充平、隋の舊書八千餘卷を得、宋遵貴は東都に監運して、舟を浮べ河を泝り、西京師に致さんとせしに、砥柱を經て舟覆へり、盡く其の書を亡ひたり。唐に至り貞觀中、魏徵、虞世南、顏師古繼いで秘書監となり、請ふて天下の書を購ひ、五品以上、子孫の書を工にするものを選んで書手となし、繕寫して內庫に藏し、宮人を以て之れを掌らしめたり。『玄宗は、馬懷素に命じて、修圖書使となし、褚元量と俱に整比せしめ、會ま東都に

圖書四類の改定

圖書の繕寫

幸し、乃はち乾元殿東序に就て檢校し、元量等は宰相宋璟蘇頲と同署し、又た民間の遺本を借りて傳錄したり。京師に還るに及んで、書を東宮麗正殿に遷し、修書院を著作院に置き、其の後大明宮の光順門外、東部の明福門外に、皆な集賢書院を創じめき。既にして太府、月に蜀郡の麻紙五千番を給して、季に上谷墨三百三十六丸を給し、歲に河間景城清河博平四郡の兎、千五百皮を給して筆材となし、兩都各書を四部に聚め、甲乙丙丁を以て次となし、經史子集を四庫に列し、其の本正あり副あり、軸帶帙籤、皆な色を異にして之れを別かてり。』

四庫圖書の整備

安祿山の亂、尺簡藏せず、圖書亂亡せしかば、元載の相となるや、奏して千錢を以て書每一卷を購ひ、又た苗發等に命じて、江淮をして括訪せしめたり。文宗の時に至つて更に祕閣に詔して遍ねく搜採せしめ、是に於て四庫の書、復た完きを得、分つて十二庫に藏せり。黃巢の亂存するもの、蓋し尠なく、昭宗は京城に播遷して、孫惟晟、書を本軍に斂め、敎坊を祕閣に寓せしも、詔して其の書を還さしめ、韋昌範等に命じて、諸道求購せしめしが、洛陽に徙るに及んでは、書皆な蕩然として遺るなきに至れり。唐代文運の隆昌は、方さに圖書の整備と相表裏して、一時の極盛を致せ

亂後の圖書搜採

唐代學術に於ける貢獻

しや以て觀るべし。

唐代に於て、圖書を分類して、經史子集の四類となせしは、既に圖書整頓に於ける、一大進歩なりき。然るを更に遺本を收拾し、正副を作くり、或は購入し或は傳寫し、以て經史子集の四庫に於ける圖書をして、益整備せしめし如きに至ては、其學術勃興を助くること大に、其文運を振はしめしこと盛なりし者、勿論是に由て概見するに足るところにして、獨り當代の學術に貢獻するところの大なりしのみならず、其後代に垂るゝところの賜に至ては、たとへ逝亡多かりしも、其惠や亦固より言を俟たざるところたらずんばあらず。獨り數曆に於て、梵文飜譯に於て、一新時期を開きしのみならず、圖書整備に於て、此の如きの盛を致せしは、殊に唐代に於て、學者の注意せざるべからざるところたり。儒術の勃興をのみ、唐代文運の盛と思惟する世の迂儒は、更に眼を此に注ぎ來るを要す。

第四章　五代學術の衰頽

唐代學術の盛なりし後を、喪亂相踵ぎて、唐季の學術亦見るに足るものなかりし

周世宗の經術奬勵

が、黄巢の亂より、益萎靡衰頽して振はず、文運日に衰へ、以て五代に至り、梁は二世十七年、唐は四世十四年、晉は二世十一年、漢は二世四年、周は三世十年、合して五十餘年の間、兵亂、等相踵ぎ、中外相蹂し、文運の見るべきものなかりき。獨り唐の明宗、周の世宗稍觀るに足るものありき。

唐の明宗の世康澄上疏して、時病を論せし如きは、萬綠叢中紅一點の觀ありしところにして、殊に周の世宗が、秦隴を取り、淮右を平げ、三關を復し、威武の聲、一時を震懾せしめて、内には儒學文章の士を延き、制度を考へ、通禮を修め、正樂を定め、刑統を議し、其の製作の法、皆な後世に施こすべきありしは、蓋し五代の時代を通して、獨歩なりとせざるべからず。其の即位の明年、天下佛寺三千三百三十六を廢し、國内方さに錢に乏しきを以て、詔して悉く天下の銅佛像を毀ちて、錢を鑄らしめたるが如き、其の唐の元稹が均田圖を見て、之れが圖法を頒ち、吏民をして之れを習知せしめたるが如き、其の治敎亦た見るべき者ありしも、不幸にして早やく殂しき。然るも世宗が能く淮右を定めたりしは、全く王朴が獻せし平邊策を用ひしによれりとせば、之をして尙ほ康濟ならしめたらんには、其の更に大に文運を振

王朴の曆法樂律改定

ふものありしや、疑なかりしならん、惜いかな天年を假さずして其の大業をなすを得ざりしや。』

王朴は獨り當世の時務に明なりしのみに非らざりき、陰陽律曆の法に至ては通せざるなし、詔して大曆を校定せられしに、朴は近世符天、流俗不經の學を削去して、通經統三法を設け、歲軌離交、朔望周變率策の數を以て、日月五星を步し、欽天曆を爲くりき。又た雅樂を考正して、十二律管互ひに吹くは、其の眞を得難きところなりとて、乃はち京房に依り、律准を爲くり、九尺の絃十三を以て、長短の寸分に依つて柱を設け、七聲を用ゐて均となし、樂成つて和し、後世之れを用ふるに至れり。

五代の間、其の文運に關するものわり、即はち唐の明宗及び康澄、周の世宗及び王朴を除いて、亦た一人の名を傳ふるものなく、見るべきものなし。戰亂相踵ぐの時なりしが故に、學者の輩出を見る如きは、望むべからざるところに屬せりとはいへ、當代の學者獨り王朴を推さゝるを得ざる如きは、文運の衰も亦甚しかりしなり。

五代に於ける、學術の衰頽は、唐季よりの亂離相踵きし爲め、益々其度を極めしと

宋代學術の源

雖ども、尙ほ一二學者の、文運を既に倒れたるに支へ、漸く前代の盛を承けて、之を後代に傳へしものありしこと前述の如し。學者は概して五代亦見るに足るべきなしとなせども、天文、曆數、音樂に於て、尙かく嶷然として、一家をなし、一朝を開きし學者の、屈起するありしに見なば、たとへ衰頽せりといふも、尙後代の學術に、恩惠を遺せしもの此の如きありしは、何人も之を承認せざるを得ず。宋代學術の盛、此時に胚胎せり。

第五章　宋代學術の革面、性理學の勃興

漢代の學者は、先秦の學術を繼ぎて、之を三國兩晉南北朝の後に於て、遙かに唐代に傳へたり。唐代の學者は、漢代學者の訓詁を疏解して、古代の文物、上古の敎化を知り、五代を經て、亂離相踵ぎ、唐時の學術、半は泯滅に歸して、こゝに宋代に至り、學者は、漢代の學術以外に、一新面目を開き、一新旗幟を立つるに及べり。

宋の太祖は、唐季に於ける藩鎭偏重の弊に懲りて、首として文吏を用ゐ、武臣の權を奪ひしが故に、自ら宋代に於ける、文物典章の燦爛たるを致せり。太祖は國子監

宋太祖經術の奬勵

の學舍を增修して、先聖十哲の像を修飾し七十二賢及び先儒二十二人の像を、東西廊の板壁に畫き、又た國子監に幸せり。初めて和峴が定めしところの雅樂を用ゐ、又た劉溫叟が上りし所の開寶通禮を行ひ、制度典章彬々として條理ありき。宋代の文運を振作せしもの、全く太祖の時に始まれり。太宗、眞宗も亦た學を好みしと稱せられたりしも、眞宗は後年道教を好んで、王欽若が言に惑ひ、封禪して四海を鎭服し、外國に誇示せんとせしより、祠祀土木、竝び興こり、文明を粉飾したるは、之れありしも、學術の勃興には多く功あらざりき。仁宋の慶曆三年には、四門學を立て、皇祐の末には、胡瑗を以て國子監講書となし、專ら太學を管勾せしめたり。瑗は湖學に在り、教法最も備はりしより、始めて大學を建つるや、有司の請に依て、瑗が湖學の法を取りしなり。神宗は勵精して治を圖り、熙寧元豐の間、王安石の徒に信任して、專ら新法を行ひ、紛紛として制作し、朝野議論鼎沸せしより、安石又た其の黨を引用して、學校三舍法を設け、三經新議を頒たんとせしも、哲宗立つに及んで、司馬光相となり、元祐の間、盡く新法を罷め、爾後元祐熙豐の黨類、互ひに消長をなして、論爭已むときなく、宋室遂に振はざるを致たせり。徽宗の崇寧元年、學

仁宗の大學

王安石、司馬光公の政治

校三舍を建て、士を之れに取りしも、游佚の技に耽りて、大に土木を興こし、淫樂を窮はめし爲め、國敗れて、父子同じく絕域に死するを致せり。宋が南渡の後には、宗社偏安して、輩出し、支那文運の氣風、宋代の學者によりてこゝに一變せられたり。

漢唐學者の傾向

學況の變遷を論ずるに於て、一大旋轉をなせし時代として言へば、先づ之れを宋代に推さゞるべからず。漢代の學者は、一經專修の業を治め、師弟相授受して、舊談を恪守し、復た異見を生せず、馬融、鄭玄王肅の徒が、衆說を該綜して、諸經を註釋せしよりして、一經專修の業は廢せりと雖ども、然るも學者は之れが註釋に賴りて、儒經を闡明にするを得たりき。唐に至つて學者は、又た漢註を疏解して、演繹することと周詳に、旁引すること委曲にし、瑣細煩冗に涉るに至れり。然るも上世の學術狀況に關し、後世學者の能く之れを推明するを得るに至りたるは、全く漢唐時代に於ける學者の力たらずんばあらず。當時學者は單に遺經を講誦するに止まり、敢えて異說を立て、朋黨を植せざりしも、獨り漢の楊雄、隋の王通、唐の韓愈諸輩は、自ら任ずること甚だ重く、其の信ずるところを以て學說を立て、他の諸儒を蔑視

宋儒清學の新旗幟

せしありしも、其の著撰せしところ、未だ先賢に超軼して、後人を啓廸するに足るものあらずして止み、たゞ彼等は、或は古經に模擬し、或は諸子を排斥して、世に誇りしに過ぎざりしなり。延いて宋に及んでは、學者久しく漢唐諸儒が從事せしところ、記誦に非らずんば詞章にして、德性の學に於ては、意を用ゐしものあらざりしに鑑がみ、是に於て學者崛起して、道學の派を立て、性命の學を談じ、先代學者の未だ道破せざりし所を發するに至れり。然れども是れより以後は、學者各其の所見を以て、異りたる學說を立て、分派別流、其の學說によりて、對壘して相爭ひ、遂に一種朋黨の弊をして、國家社會を煩はしむるに至りしは、亦學者學說の盛を極めし弊なりしとやいはん。宋代に於ける學者の、漢唐以來の學者以外に、別に地歩を占め、一新旗幟を樹てしもの、却て學派相爭ふの弊を來たせしは、寔に千古の憾事なりしなり。

第六章　宋代性理學派の分爭

學者が學派を分立して、各相爭ふに至りしは、學術の盛を見るに至るべきところにして、其不幸にして、政權分爭の朋黨と相關して、政治上の黨派と、學說上の學派とが、雜然として一時に混同せしが如きは、寔に學術發展の爲めにも、又國家進運の爲めにも、甚だ慶すべきにあらざりしと雖ども、學者が、互に學派を樹立して相對峙し、以て當時に於ける社會の趨勢をば、多少支配するところありしに至ては、以て學者の當時に於ける地位が、如何に社會に重んぜられしやを見るべく、亦以て學術の、當時社會を支配せしこと、極めて大なりしをも見るに足るべしとせんか。政見と學說とが、一時に混淆せられしは、姑らく措き、學術の盛は、學派の分爭によりて、其一斑を知るに足らん。

政派學派の混淆

洛黨、蜀黨及朔黨

學派を以て朋黨を植つるに至りしは、蘇軾、程頤より始まれり。初め蘇軾、程頤は、同じく經筵に在りしが、軾は諧謔を喜み、頤は禮法を以て自ら持せしより、兩者相容れずして、軾每に頤を嘲侮せしかば、こゝに二人は遂に隙を生じ、其の徒兩々黨を分つて相攻むるに至れり。程頤の徒を洛黨と曰ひ、朱光庭、賈易等其の羽翼となれり。蘇軾の徒を蜀黨と曰ひ、呂陶等其羽翼となり、劉摯、王巖叟、劉安世の徒、亦た大朔黨と曰ふを樹て、羽翼尤も衆かりき。是れ宋代に於て、學者が學派を立て、門戶を搆

へて、相爭ふに至りし端緒たり。

南渡の後、蜀閩の二黨は竝びに衰へ、程子の學說獨り盛んに崇奉せられたりしが、其の學統は朱熹に至つて大に備はり、こゝに道學なる、一の學派を創へるに至りたり。朱熹の學說や、敬に居り理を窮むるを以て要となし、欲を去り性に反へるを以て主となせしより、後世學者は、之れを性理の學と稱して、周敦頤、程顥、程頤、張載朱熹を以て之れが宗となせり。朱熹と時を同うして、陸九淵も亦た心性の學を唱へしが、朱熹とは其の見を同うせざりき。熹は問學に由るを以て、研究法の本となし、陸九淵は德性を尊むを以て、研究法の本となし、『學は悟入に在り』と曰ひ、二學派每に論爭して相譏れり。一は歸納法を取り、一は演繹法を取り、一は窮理法を取り、一は道學法を採り、二者研究法を異にして相爭へり。當時固より、今世の所謂哲學、科學等あるなしと雖ども、性理學といふを以て、學說を創じ、學派を立つるに至りしは、全く宋代より始まりしなり。

朱熹の道學派性理の學

陸九淵の崛起

蓋し六朝以來、佛學大に行はれ、印度哲學の支那に輸入せられしも、亦た既に久しく、殊に梁隋の間、達磨が單傳心印法を傳へてより、心性の理を傳ふるもの、隋唐より五代を經て、宋に至りて益盛なりしが、前代よりの儒者は、たゞ六經を祖述するに止り、未だ嘗て性理を究めざりしが、宋に至りて學者皆佛學の影響を受け、程張諸學者は、凡て初め佛學に涉り、其の學問の構成を知りて後、更に諸れを儒經に求めしが故に、其の足らざるところあるを疑ふに至り、乃はち其の意見を立て、性理の說をなし、以て孔孟の言に就き、論理の貫串を求めたり。然れども元と性と天道とは、孔子の門には、得て聞かざるところにして、孟子は性を言ひしと雖ども、唯性善と曰ひしのみにて、宋代儒者のいふが如き、本然の氣質、未發既發等の說は、之れなきところたりき。性理の學說は、實に宋代の學者が創始せし、一種の哲學にして、決して孔孟の言にはあらざりしなり。故に後世學者、或は其の儒に背き佛を雜ふるを以て之れを譏るなきを得ずして、遂に明末に於ける復古學は興りしなり。

佛學の影響

宋代創作の哲學

然れども宋儒の創始せし性理の學說も、亦た固より文運の盛を發揮するに於て、其の力少なからざりしところにして、彼等の諸學說を通じて之れを考ふれば、周敦頤は易を主として說を立て、剛柔善惡中五者を以て五性となし、無欲主靜を以て人極となし、張載は天地の性と氣質の性とを以て分つて二となし、未だ理の說

朱子性理學說の大成

あらざりしも、程子に至ては、始めて性を以て理となし、以て其の學說を立てたり。朱子は程子の學說に由りて、性即理との學說を祖述し、本然氣質の兩性を分ち、復初の學說を立てたり。是に於て宋儒が性理の學說は大成せられたり。孔孟以來、漢唐の諸學者が性を論せしもの皆な氣質に就て言をなせしが、宋儒に至ては始めて理に就て性を言ふに至り、こゝに性即理の學說を見るに及べり。其の他の學者文章を以て名を後世に傳へ、當代に擅にせしもの、歐陽修あり、蘇軾あり、其の著作文章、唐代に於ける韓柳と共に稱せられ、後世學者、能く之れに及ぶものあらざるところにして、歐陽修、蘇軾以外、文學を以て名あるものも、亦た彬々として蠭出し、宋末に及んでも、戰亂の中、尙ほ詩文を以て後世に名あるものを見る少なからざりしも、然るも、此等は皆な文運の扶翊に於て、偉大なる影響ありしものにもあらざれば、支那文學史に讓りて、こゝには之れを贅せず。

文章詩賦に於て、人往々にして宋代の盛を言ひて、之を唐代に讓らずとするをば、一般の見解となす。文章詩賦は固より學術の一として、見るべきものにして、文學としては、之を除いて、當代亦見るべきものあらざりしとするも、宋代の文章は、凡て論議に長し、詩賦の如きは多く理路に陷り、渾正雄大の氣、亦見るに由なかりき。

文學に於ける性理學の影響

此等は凡て性理論者の勢力に於て、其影響を受けしところにして、其宋末に及んで、却て詩賦に於て見るに足るべきものを羣出せしめたりしは、全く性理論者の爭漸く戰亂の爲めに鎭靜に歸せし結果たらずんばあらず。宋代に於ける文學として、見るべきもの、吾輩一般學者と其見解を同うするを得ざるなり。

第七章　遼金學術の異來

宋儒が、性理の學說を立て學派を分て相爭ふ間に、東北の邊外、二個の民族は、各其異りたる學術の發達を以て、こゝに一異彩を放つに至りたり

遼は歷世、東北の地を據有して、其の俗質樸、未だ當時南方浮華の習に染まず、故に政簡にして治まり、法疎にして行はれ、學者は唯だ實用を務むるのみにして、虛文に流れず。是を以て、文藝の士多く聞ゆるものなかりき。然れども、夫の義宗の、國を讓りて遠く逃がれ、吳の太伯の轍に出で、蕭漢家奴の、對策して時事を論じ、史には之れを遼の晁賈と稱するが如き、亦た以て遼に於る文敎の尙ほ上下に行はれし

義宗倍及蕭決家奴

を觀るべし。義宗名は倍、太祖の長子なり、生平書を好み、市して萬卷に至り、之を醫巫閭山の絕頂、望海堂に藏せり。倍は陰陽に通じ、音律を知り、醫方砭灸の術に精しく、遼漢の文章に工なり。嘗て陰符經を譯し、又た畫を善くせり、蕭漢家奴は涅剌部の人にして、經史を博覽し、遼漢の文字に通せり。耶律庶成と俱に、遙輦可汗より、重熙以來に至るまでの事迹を錄し、集めて二十卷を爲くり、又た博く經籍を考へ、制度を錄し、譔して三卷となせり。又た詔を受けて諸書を譯し、國史を修めり、六義集あり、世に行はる。後耶律儼は、皇朝實錄を修し、興宗の時、劉輝更に、諸宋初めて起りしときの事蹟を以て、詳しく之れを遼の國史に附したり。遼代の學者此の如くにして著撰するところ少なからざりしも、遼の制、書禁甚だ嚴にして、凡そ國人の著述たゝ境內に刊行するを聽るせしも、若し之れを隣境に傳ふるものあらば、罪死に至たせしが故に、其書弘く行はれざりき。蓋し國の虛實を敵に知らしめざるが爲めなりしならん。此の如くにして遼の典籍は、一も國內に流播せざりしより五京兵燹の後には、遂に舊章散失して亦た遺るものなきに至れり。

金世宗章宗の治世

金元の際に於ける元好問

遼の舊人を得て之れを用ゐ、文辭始めて行はるゝに至り、太宗統を繼ぎ、宋を伐つて汴を取るに及び、經籍及び宋の學者多く之れに歸し、熙宗は孔子の廟に謁し、北面して弟子の禮を取るに至り、世宗章宗の世、文學大に興り、庠序日に盛んなりき。當時儒者固より專門名家の學あるなかりしと雖ども、朝廷の典冊、隣國の書命等に於ては粲然として觀るべきものありしなり。一代の製作、能く自ら唐宋の間に樹立せしもの、固より遼の及ぶところに非らじ。隨て金代の學者、亦た往々にして前代に軼して、之に怨するものあり。其の文墨論議より、以て政事に及び、時を同うして名を齊うせしものは、楊雲翼趙秉文となす。雲翼は、秉文と俱に同撰して、歷鑑萬年錄二十篇を進めしが、皆な聖學聖孝の類なりき。金の季儒を以て崛起し、延ひて元代に及びしものを、元好問となす。好問は、金元の際に當り、屹然として文章の大宗となり、順天張萬戶の家藏するところの、金國實錄を得て撰述をなし、金史を傳へんとせしも、人の沮むところとなり、乃はち野史亭を其家に搆へ、金源の遺事を采輯し、得るところあれば、輒はち片紙細字を以て記錄となし、百餘萬言に至れり。後元人の金史を纂修するや、多く其の著はすところに本けり。撰するところ中

宗儒學派の新刺擊

州集は意詩を以て史を存するに在りしなり。壬辰雜編諸書、已に傳るなく、遺山集四十卷、附錄一卷、今世に行はる。蓋し好問は金元の際に於ける、唯一の文運振鼓者たりしなり、唯一の學者たりしなり。

遼金の學術は、北方素朴峻厲の氣風を帶びて、支那南方の學術に、一派の新源泉を與へ、宋儒性理の學說の爲めに、輕薄淺薄に陷れる、支那中原の學風に一新刺擊を加へ、支那學術の大潮流に於て、更に新なる一道の潮流を合流せしめたるものなりき。此の如くにして、半ば其潮流を新にせられたる、支那の學術は、更に一轉して蒙古民族の文化と抱合し、乃はち元代の新時期は造られき。

第六編　元明清に於ける學術の變遷

第一章　元代學術の新潮流、歐羅巴學術の流入

西は西方亞細亞、歐羅巴の民族と接觸し、南は印度、西藏の民族に通じ、支那北方の文化を以て、南下して支那學術潮流に、幾派の新なる潮流を合流せしめたるは、元

成吉思汗の雄圖

蒙古帝國の大版圖

代是れなり。歐羅巴文化の輸入は、此時より始れり。

元の太祖成吉思汗は、蒙古の幹難克魯倫二水の間に起り、蓋世の雄を以て、大陸に衝行し、八紘を併呑するの志あり、蒙古の諸部を率ゐて、亞細亞を經畧し、遂に歐羅巴に及び、兵馬の過る所、遠近慴服せざるはなかりき。印度、土耳其、波斯、亞剌比亞、匈牙利、露西亞、皆其の蹂躪するところとなれり。成吉思汗は、其の經畧せしところの地を分ちて、四汗國となし、支那より滿州に至り、蒙古より西藏に至るまでをば叔窩濶台をして之れを管せしめき。天山南路より喜馬拉山に至り、西は興都克士山に至るまでをば、仲子察合台をして之れを管せしめき。花剌子模より波斯印度斯河に至り、興都克士より高加索山に至るまでをば、季子拖雷をして之れを管せしめき。地中海より裏海に至り、黑海、阿速海に至り、延びて北氷洋に至るまでをば、伯子求赤をして之れを管せしめたり。既にして成吉思汗歿し、太宗窩濶台、定宗貴由、憲宗蒙哥を經て、世祖忽必烈に至り、亦太祖の志業を繼ぎ、遂に宋を滅し、支那本部を戡定して、皇帝となり、兼て蒙古の大汗となれり。西亞細亞も亦、其統治を受け、版圖の大なる、古より未だ之れあらざりしところたりき。幾ならずして、西亞細亞の

東歐羅巴との觸接

諸國は分崩して、元も亦尋て亡びしも、其の後忽必烈汗の裔孫帖木兒汗（タメルラン）、復た撒馬兒罕（サマルカンド）に興り、西亞細亞、東歐羅巴を混一して、莫古兒（モゴール）帝國を立て、將に長驅して支那に入り、明朝を伐たんとせしも、中道にして病沒せり。蒙古民族の計畫、皆此の如く宏大なりしは、成吉思汗の遺謨に隨へばなり。

蒙古民族は、もと遊牧の民にして、文學未だ開けざりしこと、當時尙は未開の古の如くなりしも東歐羅巴に於ては、羅馬帝國に於ける文明、未だ地に落ちず、工藝又盛なりし時なれば、若し夫れ其文明を東亞細亞に輸入し、其工藝を蒙古の諸國に轉用せしが如きありしならば、蒙古の文運は、其の東歐羅巴を觸接せし時より、面目を一新するものありしならんに、蒙古の君主は、唯遠略を事とし、武功を務めしのみにて、學術文敎の如きは、深く意を留めず、單に其の地方の習慣に從はしめて、人心を收めしが故に、歐羅巴の文明も、多く輸入せられず、支那の儒敎も、單に支那本部に行はれしのみにて、唯佛敎が兼て蒙古の諸部に行はれ、道敎、回敎、又各蒙古の民族間に行はれしに過ぎざりき。此の如くにして、元の世も終りたれば、未だ文運の丕に興されしを見るに及ばざりき。今夫れ成吉思汗及び帖木兒汗の雄略英

支那學者蒙古史の組略

圖は、一世を振蕩せしこと、彼のアレキサンダー、ケーザア、ナポーレオンに過ぎたるものありしも、元史及び其他支那の史書に記するところは、甚だ粗略に屬し、僅かに却て歐羅巴の書籍に徵して、其の偉績を知るに過ぎざる如きに至りては、蓋し史を編みしもの、唯だ支那本部に詳かにして、域外には之れを略し、爲めに絕大の事業をして、世に明らかならざらしむるを致せし者にして、固より千古の遺憾たらずんばあらじ。

元代佛敎の崇尙

元代は此の如くにして、唯だ遠略を事とせしに止まりしも、元興りてより百年、上は朝廷內外の各官より、下は山林布衣の士に至るまで、經に通じ文を能するを以て、當時に顯著なりしもの、勝げて數ふべからざりき。世祖忽必烈は、漢人種の國俗に從ひて、佛說を崇尙し、學者は前代に於ける宋學を承けたれば、兩つながら並行して盛なるを致せり。忽必烈は、始め約して漢人を以て相となさずと定めしが故に、臺省の要官は、皆北人を以て之れに充て、南人を用ふること、甚だ鮮かりしと傳ふれど、忽必烈の人を用ゐしは、全く蒙古民族なりしと否とを以て區別を立てざりき。

異人種の任用
外國學術の注入

八思巴は薩摩斯迦の人なりき。佛學を以て、西藏より入て、帝師となれり。馬可孛羅は伊太利人なりき。材幹を以て、樞密副使となれり。愛薛は猶太人なりき。星曆醫藥に通ずるを以て、翰林學士となれり。迦魯答思は畏兀人なりき。諸國の語に通ずるを以て、大司徒となれり。阿合馬は回紇の人なりき。其の姦未だ發かれざりしとき尚は用ゐられて宰輔に至れり。其の人才を擧ぐるに、種族を撰まざりしは此の如きありしなり。其の殊に漢人に於て用うるもの鮮かりしは、當時支那の學者は、性命の說を守りて、實務の方に乏しく、而して忽必烈は儒者を陷とし、又た道敎を喜ばざりしが爲めなりしなるべし。其の至元十八年、張易等の言に因りて、道書は惟だ老子の道德經を存し、餘は悉く焚毀せしめたる如き、以て其の一班を見るべし。

忽必烈世間の學者

然れども、忽必烈が南北を統一して、一大帝國を建てしより、嗣後復た有爲の英主、踵いて出づるなく、其の帝業も幾もなくて衰へ、隨つて元の文運も遂に振興せられずして止めり。

然るも元代に於ては、殊に忽必烈の治世間に、學者の勃興せしもの少しとなさず。耶律楚材は政事に於て、許衡、吳澄は經術に於て、劉因、郟經は儒學に於て、郭守敬は

伊太利、猶太、四厥語人の影響

算數に於て、八思巴は佛說に於て、朱震亨、李杲は醫方に於て、虞集は文章に於て、何れも元代に於ける學術文敎に貢獻するところなかりしはあらず。耶律楚材には湛然居士集あり、載するところ詩を多しとせり。國事鞅掌、僅かに吟咏を以て懷を寄せ、著作に遑あらざりしが故なりき。許衡は、郭守敬と與に、新に儀象圭表を製し、名を授時曆と賜はり、其の著述には、小學大義、讀易私言、孟子標題、四箴說、中庸說、語錄等あり、朱子の學說を首唱せり。吳澄は易書詩春秋禮記纂言を著はし、章句を點竄し、經文を移置する、悍然として臆斷して、顧みず、其の學派朱陸の間に出入せり。其の他の學者亦た各其の所長を以て、元代の文運を扶翼し、一時の盛をなせり。

元代に於て殊に留意すべきは、歐羅巴人、猶太人、西厥人等の諸學者を收用せしこと是れなり。其歐羅巴人には、伊太利人ありしに見なば、歐羅巴學術の、如何に支那に輸入せられたるやは、言を俟たざるところたりとせん。是れ元代に於ける學術の、確かに一新時期を開きし所以の、一大原由にして、支那學術の、面目を一新し、經術に至るまで、新知識の爲めに、古來學者の研究法以外に、一新學風を形成し、吳澄の六經を講ずる、悍然として臆斷して顧みざる如きを致せしもの、全く新思想の、

弘く域外諸國人より注入せられたるの結果たらずんばあらず。殊に郭守敬が、曆數に於て、古今の異を辨し、一大革新を加へたりし如きは、固より、猶太人、愛薛の影響を受けしものたらずんばあらず。當時に於ける伊太利、猶太は、既に文明の發展に於て、著しき程度に達し、諸種の新なる思想、學術は、彼に於て既に、其盛を極め、殊に天文、曆數に於ては、勿論著しき發達進歩をなせし後なれば、郭守敬が彼等の影響を受けしものも、蓋し大なりしは事實なりしが如し。

猶太曆數の流入

第二章　元代に於ける曆數の革新

元代の學術に、新生命を與へしものは、外國人の影響是れなり。當時伊太利人、殊に猶太人の、數曆に於て、發達せる知識を有せしは事實なり。元代の學者が、數曆に於て、支那三千年來の誤謬を正して、こゝに一代の新面目を開かしむるに至りたるもの固より此等伊太利人、猶太人の力、多きに居りしところたらずんばあらず。元史及元史類編を案ずるに、郭守敬は、曆數に於て、一機軸を出し、一新面目を開きし大家なりき。其の最も長せしところは、水利の學、曆數の學、及儀象制度の學なり

郭守敬の崛起

新曆法、新測儀

支那曆數の變遷研究

しといふ。然れば天文、地理、土木工學に於て、蔚然として大家を成せしものたりしに相違なきに似たり。其水利に關しては、中統二年、世祖召して上部に見しとき、郭守敬は水利の六事を面陳せりといへば、土木工學に於ける設計も亦其長せしところなりしを知るべし。

曆數に於ける、郭守敬の事業は、更に大に見るべきものあり。至元十三年、新曆を改治し、守敬と王恂とに詔して較定せしめ、文謙と張易とを以て之を領せしめ、許衡をして其事に參預せしめたり。守敬は此の時を以て、諸の測儀を創作せり。十七年には、其較定せしところの新曆は成れり。守敬は諸臣と共に奏して曰ふ。

『帝王の事、曆日より重きはなし、黄帝の推策よりして、帝堯は閏月を以て、四時を定めて歳を成し、舜は璇璣玉衡を在みて、七政を齊へり。爰に三代に及んで、曆に定法なく、周秦の間、閏餘は次に乖けり。西漢には、三統曆を造くり、百三十年にして是非始めて定りぬ。東漢には、四分曆を造くりて、七十餘年にして、儀式方さに備りぬ。又百二十一年にして、劉洪は乾象曆を造くり、始めて日月に遲速あることを悟れり。又百八十年にして、姜岌は三紀甲子曆を造くり、始めて月食衝を以て、月宿度の

所在を檢するを悟れり。又五十七年にして、何承天は元嘉曆を造くり、始めて朔望弦を以て、皆大小の餘を定むることを悟れり。また六十五年にして、祖冲之は、大明曆を造くり、始めて太陽に歲差の數あり、極星が不動の處を去ること一度なるを悟れり。又五十二年にして、張子信は始めて日月の交道に表裏あり、五星に遲疾留逆あることを悟れり。又三十三年にして、劉焯は皇極曆を造くり、始めて日行に盈縮あることを悟れり。又三十五年にして、傅仁均は戊寅元曆を造くり、頗る舊儀を采り、始めて定朔を用ゐたり。又四十六年にして、李淳風は麟德曆を造くり、古曆章蔀元首の分度齊しからざるを以て、始めて總法を爲くり、用て朔を進めて晦晨月見を避けたり。又六十三年にして、一行は大衍曆を造くり、始めて朔に四大三小あるを以て、九服交食の異を定めり。又九十四年にして、徐昂は宣明曆を造くり、始めて日食に氣刻時三差あることを悟れり。又二百卅六年にして、姚舜輔は紀元曆を造くり、始て食甚泛餘の差數を悟れり。以上計千一百八十二年にして、曆は七十改を經、其法を創めし者、十有三家。是れより又百七十四年にして、專ら臣等に命じて、新曆を改治し、簡儀高表を創造し、其測到の實數に憑りて、考正するところのもの、凡

郭守敬研究の結果

そ七事、一に曰く冬至、二に曰く歲餘、三に曰く日躔、四に曰く月離、五に曰く入交、六に曰く二十八宿の距度、七に曰く日出入の晝夜刻。創法るすところ、凡そ五事、一に曰く太陽の盈縮、二に曰く月行の遲速、三に曰く黃赤道の差、四に曰く黃赤道の內外度、五に曰く白道交」と。

元代に於ける、曆法の改定及創法、之に關する算數及測儀の計算創作、此等は支那學術の進步に於て、其の著しき發達の度に達せしものなりしに似たり。顧念ふに是れ固より郭守敬の精緻なる研究より出でしところとするも、其歷史的研究法によりて、前代の曆法を比較し、是に由りて其改定を大成せし如きは、少くも伊太利人、猶太人等の新思想を採用して、然りしものたらずんばあらず。況んや猶太人愛薛の、特に曆數醫方を以て用ゐられしといふに於てをや。たとへ曆法の研究に於て、未だ多く外國人の力を得るに及ばざりしとするも、少くも其新なる研究法を取り、學術思想の進步せる時代に於ける如き、古今を計較するの、比較研究法に出でしもの、全く外國人の新思想より來らずんばあらず。況んや當時の伊太利人、猶太人は、殊に曆數に於て長ずるところありしに於てをや。其の彼等に力を得ざ

猶太人愛薛の新智識登用

歐羅巴學術と合流の端緒

りしといふ如きは、殆んど信ずべからざるところたるの感あり。此の如くにして、元代に於ける曆數の改定は、殊に伊太利人、猶太人の新智識を採用して、大成せられ、こゝに支那學術史中、最も重要視すべき、歐羅巴文化と合流せる學術潮流の一新時代を開始めしを見たり。惜らくは、當時歐羅巴の學術をば、更に多く尊尚すべきを知らずして、彼の印度の梵文を歓迎して、其經文を翻譯するに力を致たせし如きの盛を見ず、爲めに歐羅巴及西亞細亞の新學術は、更に多く支那學術の血管中に注入せらるゝを見るに及ばずして、空しく學術發展の速力をば、一定の程度に於て停止せしめたり。

第三章　元代の醫學及小說戲曲勃興

支那醫術の起源

元代に於て、更に見るべき發展をなせしものは、醫術と小說と是れなり。醫術は、太古神農が、藥艸を嘗めて、實驗により藥艸の性を知りしより以來、之れありしところとするも、其の支那に於て、醫術として一家をなすに至りしは、周の扁鵲より始まれり。其後漢には淳于意あり、倉公と稱せられ、後漢には張機あり、金匱要略三卷傷寒論十卷ありき。醫家は本じて其典型となし、素問難經と與に重せられき。後者は晉の王叔和が編せしところにして、叔和は又脈經を撰しき。金に至ては、成無己あり傷寒論を註し、又自ら傷寒明理論及論方を撰せり。晉よりして南北朝、隋唐五代宋を經て其間幾百年、醫術の學、寥として聞くところなかりしも、漸く金代に至りて、其勃興の機運を示めし、金元の際より以て、元代に至り、始めて稍整備するを見るに至りたり。

李杲、朱震亨

金元の際には、李杲起れり、字は明之、東垣と號せり。內外傷辨惑論、脾胃論を著はし、久しく衰頽して振はざりし、醫術の學に向つて、新なる運命を與へたり。此の如くにして元代に及び、朱震亨は出でたり。字は彥修丹溪と號せり。格致餘論、局方發揮、金匱鉤玄を著はせり。是に於て人此の二者を並稱して朱李といひ以て其術を重んじたり。是れよりして醫術の學も漸く人の研究するところたりしも、二氏の學以外に、更に一派をなすものもあらず。自ら門戶の爭を生じて、更に著大なる發展をなすに及ばざりき。然るも醫術の學が、元代に至りて、一派の學となるに至りしは確かに此學の勃興と見るべきところにして、たとへ當時尙は未だ泰西物理の

學を採用するを知らざりしとするも、伊太利人、猶太人の、遙かにきたりて、諸種の新知識を傳へしにも拘らず、殊に猶太人愛薛の醫方に精通せしにも拘らず、外國の學術を尊尚するを知らざりし、支那の學者は、或は多少愛薛の醫術を參用せしありしとするも、獨り醫術家のみならず、一般に外國學術を歡迎すること、印度の梵文を迎へし如きの盛なるを見ず、又當時西亞細亞及東歐羅巴と相隔ること遠遠にして、世祖沒後、幾もなくして、西亞細亞に戰亂起り、交通の路爲めに阻絶せしより、學術の進歩の爲めに、力を盡くして國外の新知識を注入するを勗めず、遂に醫術をして、僅かに勃興して、尚ほ陰陽五行の說に掩蔽せられて、其發達進歩を大ならしむるを得ざりき。勿論當時に於ても、歐羅巴に於ける醫術は、尚ほ未だ著しき進歩をなし居りしとはいふべからざりしも、其研究法の、東洋と自ら別なりしは事實なり。若し夫れ此の如くにして、當時支那の醫家をして、陰陽五行の說に拘泥するなからしめ、東西相通じて其知識を交換するあらしめば、醫學の進歩は、必らず早く其の著大なるを致せしや知るべかりしに、支那の醫家が、依然として今日に至るも、尚ほ國外の進歩せる醫術を採用するを敢てせず、空しく陰陽五行の

醫術進歩の遮斷

說に惑溺せられて、其の非を知らざる如き陋態に陷るに於て滿足するは、亦憐むべきところとせざるべからず。元代に於ける醫術の勃興が、未だ盛なるを得ざりし者、全く百代の憾たらずんはあらじ。

元代に至りて、小說戲曲亦勃興せり。小說は元以前に於ては、大抵神仙變異、或は巷說街談を記述するに過ぎざりき。もと小說は、周の稗官に出でしものにして、宋末以後、神仙變異、街談巷話を爲くるも彌繁かりしが、四庫全書總目は分つて三派となし、雜事を叙述す、異聞を記錄す、及瑣語を綴輯すの類なりしが、元代に至りては、諸種の新思想が、蒙古民族及其他外國人によりて注入せられし結果は、人心をして奇異を聞くを好むに至らしめ、學者亦其耳にせしところの異聞を記錄し、漸く其盛を致たして、竟に小說の勃興を見るに及べり。此の如くにして水滸傳の大作は世に出でたり。その作者に就ては、說區々にして一ならず、今之を詳にするに由なしと雖ども、一般に之を施耐庵の作なりといふところたり。此の如くにして明代に至り、小說益盛んにして、西遊記、金瓶梅出で、後世水滸傳、演義三國志と共に、稱して四大字書と稱するに至れり。元代に於ける小說の勃興は、此の如くにして明

小說の大作

代に至りても衰へず、竟に清朝に至りて、益其盛を致たすを見るところとなれり

戲曲に於ける南曲北曲

戲曲に於ては、漢以後、詩に樂府の体あり、後樂府の歌法は、唐に至て傳はらず、その歌ふ所のもの皆絶句となり、唐人詩を歌ひし法も、宋に至て亦傳はずして、其歌ふところのもの皆詞となり、宋人詞を歌ひし法も、元に至りて亦漸く傳はずして曲調となり、一變して戲曲乃はち起れり。元の時已に南曲、北曲の別あり。南曲は琵琶記を以て其首とし、高則誠の著はすところなりき。北曲は西廂記を以て其首となし、王實甫の作りしところなりき。此の如くにして元代に於ける戲曲も亦、盛んに行はるゝに至り、竟に明代に及んで、戲曲の作家に、沈青門、陳大聲等の輩出するわるを見たり。元代に於ける戲曲小說の勃興が、明代に至りしも、更に衰へず、延ひて清朝に及んで、尙ほ盛んに行はるゝを見しは、蓋し元代以來諸學術の變遷が、社會の變化と共に甚しき轉移をなし、忽ちにして蒙古族入りて君主となり、忽ちにして漢人種起りて天下を奄有し、又忽ちにして滿洲族出て、宇內を統一し、社會の狀態著しき變動を經て、學術の變化も亦著しく、人心の珍異に注目するもの益甚しきに至りしを以て、蓋し其一大原由とせずんばあらじ。

明代學術の規模

第四章　明代經術の尊尙

明代は漢人種が、支那に建設せし、最後の王朝なりき。既に蒙古民族の天下を鎭定して、始めて再び漢人種の王朝を立つ。其學術を尊尙して、新王朝の尊嚴を發揮せんとせしもの、寔に漢人種として、固より當然の事なり。既に漢人種固有の學術を尊尙して、以て王朝の尊嚴を盛んに發揚せんとす。故に其凡ての文物制度が、悉く偉大なる規模を以て、經營せられたると同じく、學術に於ても、學者の氣風、皆堂々として、王者の大風を鼓吹するの概ありしなり。學術を以て、王位の裝飾となさんとせしもの、獨り君主の期圖たりしのみならず、又學者も其經術を挾んで王風の太平を飾らんとはなしき。

故に蒙古が創立せる王朝の後を承けし明の太祖は、布衣に崛起し、漢人種を以て、海宇を奄奠せしことゝて、其の文物制度、俱に大に王風を發揚するの助となさんとはなしき。たゞ夫れ太祖は、元政の廢弛に懲りたり、故に治は峻嚴を尙び、耆儒を禮致して、禮樂を考定し、首として國子監を建て、其の學は凡て實用を尙へり。成祖

永樂帝の宋元學風鼓振

永樂帝は逆取せりと雖ども、太祖の遺謨を順守し、永樂中胡廣、楊榮、金幼孜等に命じて、五經四書大全を修めしめ、皆な宋元の註を用ゐて學者の矜式する所とせり。是に於て乎漢唐訓詁の學は愈微にして、宋元性理の學は益盛んとなれり。以て明代を終ふるまで、遵依して變易するところあらざりき。明代儒教の重んせらるゝ又た孔子の褒贈に於て、變易するところなきに由て之れを觀るべし。

孔子陞名王號の停止

孔子は、歷代褒贈を受けたりき。漢の平帝、元始元年、始めて謚を宣尼父と加へり。後ち魏の太和十六年、改めて文と謚せり。唐の太宗、貞觀十一年には、尊んで宣聖尼父とし、玄宗の開元二十一年には、始めて進めて文宣王と謚せしが、明に至りて初めて之れに因り、文宣王の謚を用ひしに、世宗の嘉靖九年、改めて至聖先師孔子となせり。以らく『孔子生れて王とならず、歿して之れを王とするは、理に於て未だ安からず、且つ文宣の號、未だ以て孔子を盡くすに足らず、至聖と曰はゝ、該せざるなく、先師と曰はゝ、名正うして實稱易らざるべし』と。又た其の後を錄して襲封せしは、漢魏に在ては、褒聖宗聖と曰ひ、晉宋に在ては、奉聖と曰ひ、後魏には、崇聖と曰ひ、北齊には恭聖と曰ひ、後周及び隋には、封するに鄰國を以てし、唐初には褒聖と曰ひ、

二個主權不可認の觀念

開元に至つて文宣と曰ひ、或は君となし、侯となし、公となし、太夫となし、以て其の祭祀を奉せしめしに、宋に至つて封じて衍聖公となし、明清は之れに仍れり。孔子の謚號をば、王と稱するに至らしめたるは、明代に於ける、君權の漸く鞏固となり帝王と教王とが兩立するは、主權を二にするゝのなりとの觀念起り來りしが爲めにして、以て明代に於て、如何に政治の思想觀念が發展し來りしかを見るに足らん。

權力と學說との衝突

獨り明代に於ける政治思想の、著しく發展し來りしのみならず、始めより君主は、凡て學術を以て、王位を飾らんと睨め、學者其學ぶところを以て、大に王者の君位を修飾して、其太平の風を後代に傳へんとせざるなかりしが故に、政治と學說とは、宋代と同じく、動もすれば相混同せられ、時に學者の君主と衝突し、學說の權力と相容れざることあり、永樂帝は、竟に方孝儒を刑するの已むを得ざるに至り、王陽明亦閹豎の難の爲めに、久しく謫流の身となりしことありき、學術を尊尚するのもと全く君位を飾らんが爲めに、切要ありしところたりしなり、爾かく學者と權力者との衝突を、致せしもの、亦全く怪むには足らざるなり。故に明代の學者は、

凡て雄渾壯大にして、其學說亦前代未だ嘗て見ざるの創見を立つるもの、尠しとなさゞりき。是れ皆漢人種所立の最後の王朝を飾らんが爲めに、其全力を盡せしの如き觀あるところたり。

薛瑄、王守仁の二學派

第五章　明代學者の輩出

明代は、近古に於て、尤も學者の輩出せし時代なりき明初の學者は、多く元代の遺儒にして、專ら宋學を修め、當時科學の法を定むる、亦た元の制を承け、經義の一に程朱を宗とせしもの亦た學術の前代より後代に傳承せられし、普通の順序たちずんばあらざりき。永樂中、五經四書大全を修め、皆な宋元の註を用ゐたり。永樂帝は英主なりき、學者を集めて永樂大典を編成せしめたり。康熙乾隆の圖書事業皆な永樂大典に本けり。英宗の世、薛瑄は醇儒を以て、篤く程朱を信じ、躬行を務めて、後生を誘導せしより、學者多く之れを宗とせしが、王守仁出づるに及んで、學術始めて分れて、各學派を成し、門戸を立つるに至り、瑄を宗とするものは、河東の學と曰ひ、心性を治むるを以て敎となし、程朱の說を守り、守仁を宗とするものは、姚江の學と曰ひ、良知を致たすを以て敎となし。陸氏の說に本づけり。顧憲成が學を東林に講ずるに及んで、門戸學派の爭益甚しく、遂に黨議をなして相傾軋し、明をして亡ぶるに至らしめたり。

明代の復古學

今明代に於ける學者の一班を示さんか爲めに明史文苑傳の一節を抄出せん。「明の初め宋濂、王禕、方孝儒は、文を以て雄に、高楊、張徐、劉基、袁凱は、詩を以て著はれ、其の勝代の遺逸、指數すべからず、蓋し蔚然として盛と稱す。永宣より以還作者、遞興り、皆な沖融演迤して、鉤棘を事とせず、氣體漸く衰へり。弘正の間、李東陽は宋元に出入して、唐代に溯流し、聲を館閣を擅にせり。而して李夢陽、何景明は、復古を倡言し、文は西京より、詩は中唐よりして下、一切吐棄せり。操觚談藝の士は、翕然として之れを宗とし、明の詩は斯に於て一變せり。嘉靖の時に迨んで、王愼中、唐順之輩は、文は歐曾を宗とし、詩は初唐に倣ひ、李攀龍、王世貞輩は、文は秦漢を主として、詩は盛唐を規とし、王李の持論は、大に夢陽景明と相唱和せり。歸有光は、頗る後れて出で、司馬歐陽を以て明ら命じ、力めて李何王李を排し、而して徐渭、湯顯祖、袁宏道、鍾惺の屬、亦た各爭ふて一時に鳴る。是に於て、李何王李を宗とするもの稍衰へ、啓禎

宋儒學說再興　王陽明の輩起

東林の黨陽明學の攻擊

の時に至り、錢謙益、艾南英は、北宋の矩矱を準とし、張溥、陳子龍は、東漢の芳華を擷して、又た一變せり」と。明末に至りては郝敬、何楷の輩は經解を作くり、好んで議論を爲くつて、先儒を詆摘せしも、未だ多く見るに足る者はあらざりき。又た道學に就ては、薛瑄の後、陳獻章、胡居仁、俱に吳與弼より出でたりしが、吳與弼の學は、朱陸の間に出入して、獻章は、上は陸象山を繼き、下は王陽明を啓き、居仁は、朱晦庵を恪守して、畫一違はず。二派こゝに立つて、王陽明乃ち起て良知の學說を唱へき。明季に至りて、顧憲成起り、王陽明が「無善無惡心之體」の說を駁し、高攀龍、錢一本、薛敷敎、史孟麟、于孔兼輩之れに從ひ、東林の黨をなし、門戶を張つて、他の學派と爭ひしが、憲成沒して後も、尙は蔓延紛糾して止まず、凡そ朝政を抗論するもの、皆指して東林となし、抨擊して虛日なく、終に魏忠賢の毒焰に逢ふて、一網に盡く之れを去られ、殺戮禁錮、善類爲めに一空となるに至れり。崇禎立つに及んで、始めて漸く收用せしも、朋黨の勢已に成り、紛爭太だ熾んにして、明亡ぶるに至るまで止まざりき。明代學派の盛にして、學說の紛興せし、以て其の文運の盛なりしを觀るに足るべしとするも、學派學說の爭よりして、累を邦家に及ぼせしに至ては、亦た學者

明代學者の影響

說を立つるの罪たらずとはいふべからず。而して其宋代學者の風習を承けしものたりしは爭ふべからざるなり。

此の如くにして、明季より、學者は二派に分かれて、其學統を傳承せり。薛瑄、胡居仁の學を、河東の學といひ、陳獻章、王陽明の學をば、姚江の學といひ、二學派相對峙して、共に性理に爭ひ、以て明の亡ぶるに及んで已まず。清朝に至りても、尙は依然として、兩學者の學統、陰然として傳承せられ、性理を談ずるの空疎に厭きし學者が、其反動として考證の學を唱ふるに至りし後と雖ども、尙は根柢に於て、兩學派の相對立するを見るなり、以て明代に於ける、學者學說の影響が、如何に大なりしかを知るに於て、思ひ半ばに過ぐるものあらん。明季より清初に至りて、尙は門戶を搏へ、學者を以て居りし輩は、蓋し明季の遺儒なりしなり。清朝が儒臣を網羅して圖書集成の大事業をなすに至りしものも、皆此等明季に於ける、遺儒の力なりき。而して此等の學者が、皆二學派の學統を承けしに見なば、明代の影響は遠く清朝に及ぼしゝものも、亦怪むに足らじ。

第六章　明代歐羅巴數曆の譯行

元代に於て學術の殊に伊太利人、猶太人の新知識に資するところありしは、數曆の學なりき。郭守敬は、其精緻なる研究を數曆に盡くし、其嶄新なる測儀を之れに應用して、歷代所傳の曆に就て、深かく其異同を正し、竟に支那三千年來の曆に向て、一大校定を加へ、數學を修めしより、進んで一代の曆法を定めたりき。

星曆の學、數理の術は、古來相待つて傳はり來りしところにして、殊に數學の用の如きは、其及ぼせしところの範圍、極めて廣く、天文推歩の術には言ふまでもなく、兵賦財政の學と雖ども、悉く數學の用に借らざるはなかりき。其他物理の學、數理を推して研究すべきものは古來一に之を數學に待たざるはなかりしなり。たゞ夫れ周以後兩漢以來、凡て數學を重んぜず。周代保氏の教へしところ、六藝の中には、禮樂射御書數として、數は確かに其一に居りしにも拘らず、周以後、學者は之を視ること甚だ重からず、凡べて之を一の方伎なり、學ぶに足らずとして、皆深く其術を治めず、其學の傳承する、爲めに詳かならずして終りき。九章算術は、周代保氏

周以後數術の輕視

の遺書なりと傳へらるゝも、其何人が傳へしところなりしかは、今之を知るに由なく、單に數學に關する、一の古籍として存するなり。周末には孫子算經ありて、其法は孫子に出でたりと稱せらるゝも、是れもと依託の書にして、信を措くに足らず。數學は竟に一科の學となるに及ばずして、其發達は兩漢以來、讖緯五行の說盛んに行はるゝに及んで、亦見るに足らざるに至りぬ。

此の如くにして、數學は單獨の發達をなすに至らずして終り、僅に星曆の學に伴ふて、其術の應用せらるゝを見しには過きざりしが、其星曆の學たるや、其源と遠く唐虞の世、羲和が世々其財を掌りしより、歷世其術を傳へしに發したれ、其術を傳ふるもの、歷世其精を加ふるに至らずして、却て周代に至りては、唐虞の世よりも、其術の頗る粗なりしを見たりき。交食紀閏算法の如きは、堯舜の世善く之を知りしにも拘らず、周人或は之を失して知らず、日食に遇ふて朝見には儀を廢し、禘郊には祭を廢し、葬埋には柩を止むる如きの禮あるに及びき。曾子の問に見て知るべし。其他左傳に見るも、又屢閏を失せしを指點すべきあり。此の如きは寧しろ周代に至りて、星曆の退歩せしを認むべきに似たり。星學を以て世に名ありしも

星曆學の變遷

周代星曆學の退歩

漢代讖緯五行の迷想

のは、周の初には史佚あり、又萇弘ありき。春秋の時には、魯に梓愼あり、鄭に裨竈あり、晉に卜偃あり、宋に子韋ありき。戰國の時には、楚に甘公あり、魏に石申ありき。其術や分野占候に本きて時變を察せしに過ぎざりしより、戰國の世一轉して秦となり、再轉して漢となり、其術遂に流れて漢儒が讖緯五行の說となり、星學は數學と共に、凡べて一大迷想の中に埋沒せられ、其特種の光彩、亦見るに見られずなりぬ。

漢代讖緯五行の說が、一たび星學數學を、一大迷想の中に埋沒してより、漢には張蒼、洛下閎あり、南北朝には宋に祖冲之あり、唐には李淳風、僧一行ありて皆數學の術を治め、之に由りて星曆の學を考定し、曆法も漸く完備するに至りしが、其研究は尙ほ未だ精緻を極むるに及ばず、又歷代の曆法を一貫して其誤謬を正すに及ばず、たゞ前代の誤を正して、一代の曆法を定めしには過ぎず、一發明を星体運行の上になせば隨つて之を基礎として、曆法に更革を加へしに止まりき。元代に至りて郭守敬出で、泰西の新知識に資りて、歷代の曆法を貫いて、其誤謬を正し、歷代諸家が、天体運行上になせし發明をば、遍ねく比較して、以て一代の曆法を定めし

元代曆數の復興

永樂帝時代航海術の發達

歐羅巴星曆算數書の譯行

に至て、星曆の學は、數學と共に、益其發達を大にしたりき。

此の如くにして元代より、新生命を得たりし星曆の學、算數の術は、明代に至りて更に其盛を加へたりき。泰西の曆法、推步の術、其他算數の學は、多く明代に至りて參用せらるゝに至りき。永樂帝以後は、航海の術も發達して、鄭和馬觀の遠く、印度洋を横ぎりて、波斯、亞拉比亞に赴ひき、亞弗利加の東海岸を南下し、更に歸朝して南洋の多島海を回航せし如きに見なば、天文の測儀、算數の學術が如何に航海に應用せられたりしを見るに足るべく、元末伊太利のマルコ、ポローが、陸上より歐羅巴との交通を開きしもあれば、海上より、陸上より、歐羅巴との交通が、漸く開始せられ、明の初よりは、歐羅巴の學術も、漸く盛んに支那に注入せられしを見るに足るべし。此の如くにして、歐羅巴算數星曆の書は、明人の手によりて譯して刊行せらるゝに至りき。

李之藻、徐光啓の徒は盛んに歐羅巴より傳來せる算數星曆の學術を採用し、之を、支那固有の算數に適用して、其星曆の學に一大更革を加へ、隨て歐羅巴よりせる星曆算數の書を譯行せしものも、亦往々にして之れありき。支那に於て、歐羅巴の

書が譯行せらるゝに至りしは、全く明代を以て、其權輿とせざるべからず。兩晉南北朝以來隋唐に亘りて、印度より傳來せる梵文の經典を翻譯せしは、寔に一時の盛を極めしところなりき。然るも當時には多く印度の學術を輸入するに於て、未だ其書の翻譯せらるゝを見ざりき。翻譯せられしものは、概して佛教の經典なりき。明代に至りて、歐羅巴の書を譯行するに至りしを見るに、其書は專ら學術に關するものを多しとし、たとへ其譯行の盛は、彼の梵文翻譯の如きを得ざりしとするも、專ら學術の書に於て、其譯行を開始せしは、寔に明代の一大特色として、學術史上に特筆大書せざるべからざるところなるを覺ゆるところに屬す。

歷史研究の機運

第七章　明末清初地理考古學の端緒

明末より清初に至りて、學者の輩出、殊に著しかりき。清の康熙帝が集めて大成せし、圖書編纂の大事業の如きは、多く明代の遺儒を聚めて、其業に參せしめしところなりき。殊に當時の學風、漸く明代道學を以て門戸を立てゝ相爭ふの餘を承け、人心既に之に厭き、學者皆考證の學を以て、歷史研究をなさんとするの端緒を啓きしことゝて、獨り經術の學のみならず、凡ての學術に關して、一般に地理に重きを置き、歷史に根據を取らんとせざるはなかりき。若し夫れ此の如き研究法をして、更に發展するあらしめ、各學科共に分科して、其研究をば更らに精緻にし、閎博にするに至らしめしならば、清代の學術は、早く一大進歩をなし、決して泰西學術長足の進歩に、一歩をも讓らざりしなるべきも、清初に至りて、考證學の勃興、却て學者を繫縛し、復古學の名稱の下に、區々として漢儒の訓詁を推闡し、古義を討ねて其精を爭ふに止らしめ、物理の討究をも、却て空疎なりとして、凡て臆測の說を排斥せしめ、學術の進歩、亦見るべからざるに至りて止みき。古義の考證をして、若し推理の說と共に並行して盛んなるあらしめば、學術の進歩は、決して訓詁の古學のみには止まらざりしならんに、康熙、乾隆二帝が、徒らに古學の復興を奬勵して、推理の學をば、之に伴ふて發達せしめざりし結果は、考證學は、單に考證學として發展せしには過ぎざりき。

考證學に於ける拘泥

然れども、明末清初の學者は、重きを考證に置きしとはいへ、清初に入りては、未だ考證の弊に深く沼るに及ばざりしが故に、其考證によりて、時に卓見を立て、古人の

顧炎武、黃宗羲の新學術

未だ道破せざるの一家言を有するもの亦少なからず、地理險要の歷史的研究、考古金石の學は爲めに學者の特色として、前代多く見ざるの盛をなしき。殊に地理に於ては、元末にマルコ、ポローの來れるあり、永樂の時鄭和が、亞弗利加及南洋に航せしありしより特段の發展をなし、顧炎武、黃宗羲の如きは、實に此等新學術の魁として見るべきところたりき。たとへ經術の學に於て、博く考證して、精く古義を推明せしと雖ども、其同一の研究法をば、地理險要、考古金石、其他所謂科學に類似せる、一科の學術に應用せしは、寔に近代の學術史上に、一異彩を放つところたりき、試みに其研究の一斑を示さん。

黃宗羲は、考證の學に於ては、固より一の大家たり。明儒學案、宋元學案の如きは、以て其經術の學に於て、如何に精緻閎博なりしやを知るところたり。其明夷待訪錄の如きは、亦一代の名著として、後代學者の宗とするところにして、古今の政事を論斷せしもの、此の如き明快なるはあらざりき。其著書の多き、近代罕に見るところにして、何れの學術に向ても、弘く一定の解釋を加へんとせざりしはなかりき。歷代甲子考の星曆に於ける、金石要例の考古金石の學に於ける、其他地理、水經、數

黃宗羲研究範圍の宏博

理、本草等に至るまで、各一家言を立てざるはなかりしこと、漢學師承記所載の傳記、其他粵雅堂、鮚埼亭、昭代、海山仙館、小石山房、楹几等の諸叢書に參見するところを見なば、其學術の大にして、其研究の範圍、極めて宏博なりしを知るに於て、蓋し餘師あらんなり。而して其殊に黃宗羲に取るべきものは、考古金石の學、星曆數理の術に於て、一新研究法を開始し、考證學の研究法を之れに應用するの、新學風を肇めしこと是れなりき。

顧炎武の考古學及地理學

顧炎武も亦博く群籍を極め、考證に精しく、明末清初に於て、苟くも學に根柢ありしと稱せらるゝものは何人と雖とも炎武を推して其最とせざるはなきところに屬す。其著はすところの日知錄は、大に知道に資するところありしと稱せられき。左傳杜解補、二十一史年表の如きは、經術に於て、史學に於て大に見るべきところありしは、言ふまでもなしとするも、是れ未だ以て其學術の大なるものを證するに足らざるところたりき。其韻學に精うして、韻學五書の著ありしは、考證研究法を、言語學の上に實行せしものなりき。金石文字記、九經誤字石經考の如き、考古錄の如きは、其新研究を古物學、考古學の上になせしものとせざるべからず。而して

閻若璩及胡渭

其殊に蔚然として大家をなせし所以のものは、確かに地理險要、水利地形に向て、考證歷史的研究をなせしに於て之を見る。天下郡國利害書、輿域志、其他昌平山水記、歷代帝王宅京記の如き、以て顧炎武が如何に、支那の地理險要、水利地形、及歷代帝王の地理に關して興敗せし迹に就て、研究するところありしかを知るに於て、思ひ半に過ぐるものあらんなり。

清初に及んで閻若璩字は百詩あり、古文尙書疏證、四書釋記の著あり、其經術に於て、考証せしところ、未だ多く取るに足らずとするも、其地理、人名、物類、訓詁、曲制、及經義を併せて、旁參互證して貫通するところ多かりしは、確かに黃宗羲顧炎武と、稍其揆を一にするを見るところたり。閻百詩と時を同うして、胡渭あり、字は朏明、是れ實に上は黃宗羲、顧炎武が古來學者の未だ研究を着せざりし、學術の新分科に向て、其新研究法を應用したりし後を承けて、以て下、清代に於ける地理方輿の學を興起せしものなり。たとへ康熙帝の奬勵に出でしものとするも、其蔚然として大家をなせしは、之れありしなり。

胡渭は、最も地理輿地の學に精しかりき。徐乾學が、康熙帝の勅を奉じて一統志を

胡渭の地理學

修むるや、館を洞庭に開いて、胡渭及黃儀、顧祖禹、閻若璩を延き、郡を分ちて纂輯せしめたりき。因て博く天下郡國の書を觀るを得、地理の學、益其精致を極はめき。家居して、禹貢錐指を著はせり。又歷代義疏、方志輿圖を作れり。搜索殆んど徧ねく、九州の分域、山水の脈絡、古今の異同に於ては、之を詳明せざるはなかりき。是れ其清初に於て、殊に注意すべき學者なりとせざるべからず。其他經術に於ける、易圖明辨、洪範正論、大學翼眞の著の如きは、未だ深く推して其功とすべき所にあらじ。

顧祖禹の地理志

胡渭と共に大清一統志の纂輯に與りし顧祖禹は、讀史方輿紀要を著はせり。是れ亦地理の學に於て、大に見るべきところにして、蓋し前古未だあらざるの著書なりとせざるべからず。宋代に廣輿記ありて傳はりしと雖ども、未だ大著述とはすべからざりしも、顧祖禹の讀史方輿紀要に至りては、確かに顧炎武の天下郡國利害書と共に、明末清初に於ける、學者の一大著述として、後代に傳ふべきものなり。十八省通志の如き、浩瀚なるは之れあるも、君主の力を以て多く學者を集めて成せしところとせば、一學者にして這般の大著述ありしは、亦以て多とすべきものたらずんばあらじ。此の如くにして清朝に於ける、地理の勃興を致し、楊守敬、饒敦秩

の歴代輿地沿革險要圖の如き、完備せる地圖の製作をも見るに至りしなり。

第八章　清朝圖書編纂の大事業

上は朱明王風の盛學術の隆なりし後を承け、茲に前代の圖書を集成せし者、之を清朝となす清朝は滿州より興れり。明季の衰運に乘じて、支那本部を經略し、太宗の時代は、方さに武功を事として、未だ文治に遑あらざりしも、大業甫めて集るに及んで即はち諸見勤大臣の子弟に詔して、書を讀ましめたり。世祖は都を北京に定め、首として國子監を修葺して大學とし、滿漢の生徒を聚めしめたり。かくして聖祖康熙帝の時代とはなりぬ。清初の學者は、要するに皆な明末の餘習を受けて尊大倨傲の風ありしより、康熙帝は其の輕薄を懲艾して、忠厚を奬勵し、人をして實學に向ふを知らしめたり。世宗雍正を經て、高宗乾隆に至り、大に元明以來の缺典を興こせしが、康熙乾隆共に壽考にして、世に御し、治化長久なりしが爲め、其の制作經綸の業、亦た大に觀るべきものあり、其の盛殆んど漢唐を凌駕するに至りたり。康熙乾隆の間、文籍の勅撰欽定せられしもの、巨帙大編陸續として刊行せら

康熙、乾隆の勅撰欽定圖書

れ、明代の遺儒を驅つて、之れをして古來希有の大圖書を編纂せしめたりしは、固より康熙乾隆二帝の、文運に貢献せしところ大なりしと稱すべきものなるも、此等の大圖書編纂が、もと明代永樂帝の規模によりて、之れを大成したるものなるを、永樂大典は之れを秘して世に傳へずして、康熙乾隆が、始めて此の一大事業を創めしものゝ如く、後世に傳へしめたるは、學者として其の德義を缺くものたるを認めざるを得ず。清朝はもと、基を滿州に創めしが故に、併せて滿州文字を用ゐたりしも、漢文字と交へて用ゐらるゝには過ぎず。歐米諸國と通交してより以來、稍〻泰西の學術を取り、多く曆算の法を改めしも、學校の設、教育の制の如きは、一に儒教を遵守すること、歴代一の如くなりき。仁宗嘉慶帝以後は、賊匪數ば起りて、國家多事なりしが故に、文運の盛は、再び康熙乾隆の時には及ぶ能はざるなり。之を要するに清朝に於ける學術の最も隆昌なりし時代は、康熙、乾隆二帝の時に在りしなり。たとへ明の永樂帝の遺謨に遵ひしもの多かりしとするも、其の巨帙大編をば、陸續として勅撰して刊行せしは、確かに二帝の學術に貢獻せしところの、頗る大なるを認むべきところたり。

康熙乾隆二帝の巨帙大編事業

巨帙大編の刊行

康熙十八年には詔して明史を修せり。四十三年に佩文韻府は成れり。四十九年に淵鑑類函は成れり。五十五年には康熙字典成れり。康熙帝の學術に貢獻せし事業は、此の如くありき。雍正帝は其後を紹ぎ、雍正二年には、重ねて詔して明史を修せり。尋いで乾隆帝は君祚を承けり。乾隆元年には易折中三經彙集の發賣せらるゝありき。四年明史は成を告げき。十二年勅して大清會典を撰せしめき。十三年勅して大清一統志を撰せしめき。十六年には經史を諸方の書院に賜はりき。三十八年に四庫全書成りき。四十四年に十八省通志成りき。四十六年に勅して歷代名臣奏疏を纂せしめき。五十六年には十三經を大學に石刊せしめき。乾隆帝の遺謨は、尙ほ嘉慶帝に及んで實行せられたり。嘉慶二年七經孟子の刻は成りき。廿一年には十三經校勘記摺子成りき。嘉慶以後道光に至りて、內には敎匪の變起り、外には鴉片戰爭起り、亦康熙、乾隆の事業を繼續するの餘裕なきに至りぬ。道光より咸豐に至り、前に鴉片戰爭あり、後に內、洪秀全の亂あり、外英佛同盟軍の戰役あり、康熙乾隆の圖書、全國に遍ねかりしもの、大半兵燹に罹りて、烏有に歸せり。是れより國勢の不振を來たせしと共に、學術の盛、亦見るに足るものなきに至りぬ。而して泰西の

康熙、乾隆の遺謨地に落つ

學術は、漸々として日に月に新なる進歩をなし、造化を欺き、天工を奪ふの發明は、世界の學術をして、殆んど其發明の底止するところを知らざるに至らしめ、獨り支那のみ、世界の大勢に伴ふて、其風氣を開發するに及ばず、康熙、乾隆が學術に銳意せし遺謨も、爲めに漠然として地を掃ふに至りぬ。

第九章　清朝學者考證學の拘泥

清初學術の尙尙、圖書の集成を以て標榜せしが故に、學者は一時彬々として輩出しぬ。明末より清初に亘りては、明代の學説盛んに其の學説を立て、清朝に事へしものは、康熙、乾隆を助けて、圖書編纂の大事業に從事し、清朝に仕へずして野處せしものも、亦た大著述を以て後世に垂れ、一時粲然として觀るべきもの少なからざりき。宋儒が始めて性理の説を唱へてより、元明の諸儒は、翕然として之れに和し、程朱の名は、孔孟に並べられ、洛閩の稱は、鄒魯に比せられ、陸子靜、王伯仁の徒、其の説を異にせしと雖ども、爭ふところは、所謂德性を尊ぶと、問學を道とするとの別に在り、要するに其の心性を主とせしは、一なりしなり。爾來學者は漢唐傳承の

考證學の勃興

訓詁學を棄てゝ顧みず、各其の所見に因て說を立て、空談臆說、肆然として雜出し、經義を牽合して、己れの學說をなし、以て孔孟の統を繼ぐものと稱せしが、清代に至りて、學者は頗る前代の空疎を厭ひ、是に於て乎、考證の學は興れり。其の說は、原と漢代の學者に本づき、古義を推闡して、臆測の學說を排斥するに在りき。此の如くにして、清代の學風、爲めに一變せしを見たり、清初には、顧炎武、黃宗羲、孫啓泰等あり、明の遺儒として、清に仕へずして書を著はし、顧炎武は考證に精しくして、清代漢學の源を開き、黃宗羲、孫啓泰は、朱陸の學を修めて、清代宋學の先を稱せしより、是に於て閻百詩、胡朏明、毛大可、並びに興つて徵古の說を唱へ、漢唐の學益盛にして、之れに次いで惠定宇、戴東原あり、次いで王允之の輩あり、皆な古學を繼承して、訓詁精詳、議論淵源あり、向きの空疎臆測の說、是に至つて幾んど一掃せられたり、然り而して學校の敎を立て、經義の士を試みたる、皆な宋說を用ゐ御纂の經解、經筵の進講、並びに宋註に本づきしが故に、宋學亦た學者の標準とするところとなり、傳承して衰へざりき。

古學の鼓吹

清代の學者は、之を通うしては、宋學の鉗制するところとなり、之れを遠くしては漢說の範疇するところとなり、各其の創見を發揮する能はずして、以て今日に至れり。曾國藩は近代の學者とすべきものなれども、皆な漢唐の學、宋儒の說に由りて、說を立つるに過ぎずして、一も見るに足るべきものなく、單に其の敎化の主眼として、忠君を說き、以て清朝に媚び、滿人に諛ふの說を立てしに過ぎず。方今張之洞は、李鴻章等と同じく、曾國藩の卷ふところとなりしものなり。亦た同じく敎忠を以て、其の說の主眼となし、以て北京朝廷に容を取るに過ぎず。清代學者の氣風、こゝに至つて、亦た觀るに足るものなし。獨り南海に何啓、胡禮垣あり、夙に自由民權を唱へ、以て清朝立國の根本に於ける誤謬を破らんとし、張之洞が著はすところの勸學篇を排擊して、痛快到らざるところなし。是れたゞ廣東の一角に、最も進歩したる學說の存するを觀るに足るべきところとなす。其の他號して學者大家と稱するもの、要するに皆な張之洞の徒のみ。

清代學者の拘泥

廣東の新思想

第十章　清朝敷術の發展

清朝に至りて、古來の諸學術に關する圖書を集成して、盛んに大帙巨編を刊行せ

數曆書の集成

しと雖ども、其學術や何れも皆古義を推演するに止りて、未だ著大なる進歩をなせしものを見ざりしが、獨り數術に至りては、清初に至り、元代より明代を經て、盛んに泰西の數術曆法を參用せし後を受けて、こゝに新なる發達を見るに至りき。康熙帝は、歷代の曆法數術を兼ね採り、明代に採用せし泰西の新學術をも參用し一の泄らすところなく、集成して律曆淵源を撰定せり。其第一部をば曆象考成とし、天文曆象の學を網羅し、第二部を數理精蘊とし、算法數術の學を集輯せり。乾隆帝は其遺業を紹ぎ、更に學者に命じて儀象考成、及曆象考成後編を勅撰せしめ、益其業を推開したりき。梅文鼎は清初の曆數學者なりき。康熙六十年を以て年八十九にして沒しき。其康熙帝を助けて、律曆淵源の書を纂輯せしは、言ふまでもなく、其著たる曆算全書の世に行はるゝもの、實に清朝に於ける、曆法數術の學に於て、一新時期を開かしめたるものなりき。

梅文鼎の曆算全書

梅文鼎は、曆法に於ても、數學に於ても、泰西の學術を斟酌せり。曆算の學は其最も精通せしところなりき。老年の後退いて罷め歸りしも、康熙帝は尙ほ詔を傳へて樂律曆算書を修めしめき。律呂正義の書成るに及んでや、康熙帝は、復た驛致して

梅文鼎の曆算全書

其校勘をば文鼎に命せしめき。其曆算全書の如きは、凡て泰西の法を參用して遺すところあるなく、當時文鼎の曆算全書と顧祖禹の讀史方輿紀要、李清南の南北史合抄と、併せて三大奇書と稱せられき。然るも李清南の南北史合抄は、疎笨不備にして、固より梅文鼎の曆算全書及顧祖禹の讀史方輿紀要とは、鼎足して立つべきものに非らざるは勿論、固より同日にして語るべからざるものなりき。文鼎は著はすところ、曆算部書凡そ八十餘種ありき。皆支那泰西の研究を參酌し、古來往今の學術を折衷して漏らすところなきものなりき、

推理學の不振　泰西學術の蔑視

梅文鼎の後、清朝亦曆算の學に於て、大家を成せるものゝあらざりしと雖ども、文鼎の學、一たび開始せられてより、其書後來學者の宗とするところとなり、人始めて曆算の有用の學なることを知り、漸く之れが研究に從事するものゝあるを致せりと雖ども、康熙、乾隆が實學と稱して、多少推理の學を排斥せし如き傾きありし結果は、一般に學者をして、其實學の旨を失して、科舉考試の學の外に、學術の研究すべきものなしとの誤解を來たさしめ、考證學によりて、經書の古義を討究し、漢儒の訓詁を踏襲して、學者と稱するの外、亦有用の學術に向つて、其全力を盡くすも

のあるを見ざるに至り、泰西の學術をも、更に參用するを知らず、却て鴉片戰爭以來は、泰西の學術を唱ふるものを以て亂臣の如く思惟し、爲めに康熙、乾隆が、學術を奬勵せし盛意も、一掃して空となり、隨て星曆の學、算數の術も、經術學者の不振と共に、嘉慶以後、道光年間に至りて、亦一の見るべきものあらざるに至りき。籌書牙籌の俗吏、金錢計算の商賈の外、亦算數を事とするものあるなく、司天臺たゞ舊時の曆法星學を守りて、其理を究めず、曆星算數の學、爲めに地を掃へり。

第十一章　清朝小說戲曲の盛行

清初小說戲曲家の輩出

元代に戲曲出て、南曲北曲の別あるに至り、高則誠の琵琶記、南曲の首となり、王實甫の西廂記、北曲の首となり、以て明代に及んで、沈青門、陳大聲等、各戲曲に於て、著作するところあり、小說に於ても、元に水滸傳出て、明に西遊記、金瓶梅出て、其盛頗る觀るに足るありしが、清朝に及んでや、小說にも、戲曲にも、更に其盛を加へたり李笠翁の十二曲は、小說戲曲の魁として稱せられ、孔東塘、供昉思の徒、亦小說に戲曲に、其絢爛の筆を染め、一世の名聲を博せざるはなかりき。而して特に清朝に至りて、小說戲曲に關し、尤も注意すべきは、小說戲曲の批評家の崛起せしこと是れなり。金聖嘆は、實に小說戲曲の批評を以て、其名世に高かりし批評家なりき。聖嘆は文を善くせり、風華月露、咳唾珠をなし、天葩の錦に擬するが如く、天馬の空を行くが如く、玲瓏燦爛、五色の筆を以て、瑤琪の字を駢べ、六朝金粉の氣、漢魏典雅の文、之を驅使すること、芥子の如く、一瀉千里、人をして其文を讀んで、恍惚として金殿玉樹瓊閣紫樓の上に在り、洞庭雲開いて萬頃一碧、青嵐拭ふが如く、波瀾起らず、桂蘭芳艸、文禽彩魚、一時に眼中に往來するの想あらしめるところたり。此の彩筆を呵して、小說戲曲を批評し、六經の英を擷し、詞賦の粹を鍾め、蔚然として一家をなせしもの、之を清朝に於ける、文學の發展に於て、一新時期を開きしものに非ずといふ、誰れか然るを認めんや。金聖嘆は、確かに清朝文學に於て、一旗幟を樹て、古今獨步を以て、一代に睥睨するに足るものなりしなり。

金聖嘆批評の彩筆

文藻の衰頽

たゞそれ小說戲曲の盛、此の如く其れ昌んに、之れが批評亦、燦然として人耳を奪ふに足るものありしと雖ども、清朝の學術は、一般に實學なる名稱の下に繫維桎梏せられ、學者は更に前代より一歩を進めて、一機軸を出すの術あらず、金聖嘆一

たび出でし後は、亦其後を承けて、更に清朝文學を鼓吹するものあらず、他の學術の嘉慶以後に於て、萎靡して振はず、徒らに俗學者の實學と稱して、訓詁古義に拘泥し、清朝宮廷に媚を呈するの外を知らざるの弊を生じ、考試科舉の學を講ずるの外、更に猛進して一家の學を立つるものあらざるを致せしと同じく、文學に於ても亦燦として章をなし、炳として光を放ち、秀麗高華、綺思匯合して、文藻斂成するもの、亦多く之れあらざるに至りき、

支那學術史綱　終

東京帝國大學藏書之印

明治三十三年十月八日印刷
明治三十三年十月十一日發行
昭和三十三年十月廿日在庫本代價金弐拾八銭

（支那學術史綱）
定價金三拾錢

著者　國府種德

發行者　東京市日本橋區本町三丁目八番地　大橋新太郎

印刷人　東京市本郷區丸山福山町六番地　水谷景長

印刷所　東京市小石川區久堅町百〇八番地　合資會社博進社工場

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

不許複製

文學士白河次郎君
國府種德君合著

支那文明史

全壹冊洋裝菊判紙
數三百廿頁

（正價 上製五拾錢郵税拾錢 並製卅五錢郵税八錢）

支那文明を調査するは、方今歐羅巴の學者が殊に留意する所なるに我邦の却て之に從事する者なきは最も怪むべきなり本書は即ち支那調査の急先鋒にして、古今東西の學者が未だ道破せざる所、未だ思慮し到らざりし所を指示し天下の支那學者を慄倒するに足る者多し

發兌元　東京本町　博文館

國府犀東君著（八月既刊）

龍吹鶴語

全壹冊洋裝袖珍美本紙數二百八十頁
正價金貳拾五錢……郵税六錢

犀東子の文は蜀棧を渉るが若く楚峽を溯るが如く滿目巉巉崔嵬奔激動盪人をして動心駭魄悸定まらざらしむ。其詩亦縱横排奡跌宕突兀一種伉爽豪邁の致あり今其筐中に就き撷來して此冊子を得たり、亦以て江湖讀者胸中の奇を鼓するに足らんか

發兌元　東京本町三　博文館

矢野文雄先生序
下條正雄先生序
佐久間鐵園君纂輯

支那歷代名畫評論

全壹冊和裝菊判上製正價四拾錢郵税八錢

本書は支那六朝より明末に至り彼地に産出せる名畫家の傳記を詳述して之に加るに該畫家の一代畫作中最も傑作として後世に留傳せるものにつき宋元明諸大家の題跋論評を附したるものなれば之を一讀するときは漢土畫派の沿革は勿論其用筆用墨より圖樣意匠に至るまで之を掌に指すが如し本朝古來漢土畫人傳の著書乏しからずと雖も其論評題跋を併せ記して其畫風の如何を示したるものなし故に此書一たび出る時は漢畫を學習し及鑑定せんとする人を資益する鮮少ならざるべし

發兌元　東京本町　博文館

文學士木寺柳次郎先生著

三版　中等教育

西洋歷史

全壹冊洋裝背皮金字入正價七拾錢郵税拾錢

歷史の書汗牛充棟其中等教育の名を冠する者亦少からず、本書の著者別に見る所あり教授時間を斟酌して繁冗に流るゝを防ぎ、成べく上世を簡略にして、近代に至るに從ひ、漸く精細ならしめ、固有名詞の發音は其時代と國々とに從ひ、多く精巧なる地圖と繪畫とを挿入し、西洋歷史を一體として說くこゝに三たび意を致せり、是等即ち本史の特色にして、從來世にある萬國史と異なる所なり

文學士木寺柳次郎先生著

三版　中等教育

東洋歷史

全壹冊洋裝背皮金字入正價八拾錢郵税拾貳錢

世界史を分ちて、東洋史西洋史と爲すは研究上又教授上頗る利ありとす、然れども從來發刊の東西洋史は、著者各其人を異にし、毫も統一する所なし、本書は即ち然らず、曩に西洋歷史を出して教育社會の好評を博したる木寺文學士が幾多の日子を費し、公私の圖書館を搜索して材料を收拾し、西洋歷史と同一なる主旨方法注意を以て之を案配調理せるものなれば、著者が二史を併見する者、庶幾くば世界史の大勢に通するを得ん

發兌元　東京　博文館

GANNANDO SHOTEN
藏南堂書店

12081

支那文學全書

全廿四冊完成紙數一冊四百廿頁以上

價 正 壹冊金貳拾五錢〇六冊金壹圓冊五錢〇十二冊前金貳圓五十錢〇全部前金四圓七十五錢郵稅一冊八錢

第壹編 正七位內藤耻叟先生講述
四書講義 全貳冊

第貳編 正七位內藤耻叟先生講述
小學孝經忠經講義 全壹冊

第三編 小宮山綏介先生講述
老子列子、孫子、吳子講義 全壹冊

第四編 小宮山綏介先生講述
韓非子講義 全貳冊

第五編 太田淳軒先生講述
莊子講義 全貳冊

第六編 石川鴻齋先生講述
文章軌範講義 全貳冊

第七編 從七位城井悔庵先生講述
荀子講義 全貳冊

第八編 正七位內藤耻叟先生講述
靖獻遺言講義 全壹冊

第拾壹編 大田淳軒先生講述
唐詩選三體詩講義 全壹冊

第拾貳編 平井魯堂先生講述
近思錄講義 全壹冊

第拾五編 正七位內藤耻叟先生講述
十八史略講義 全貳冊

第拾六編 井上哲次郎先生講述
戰國策講義 全貳冊

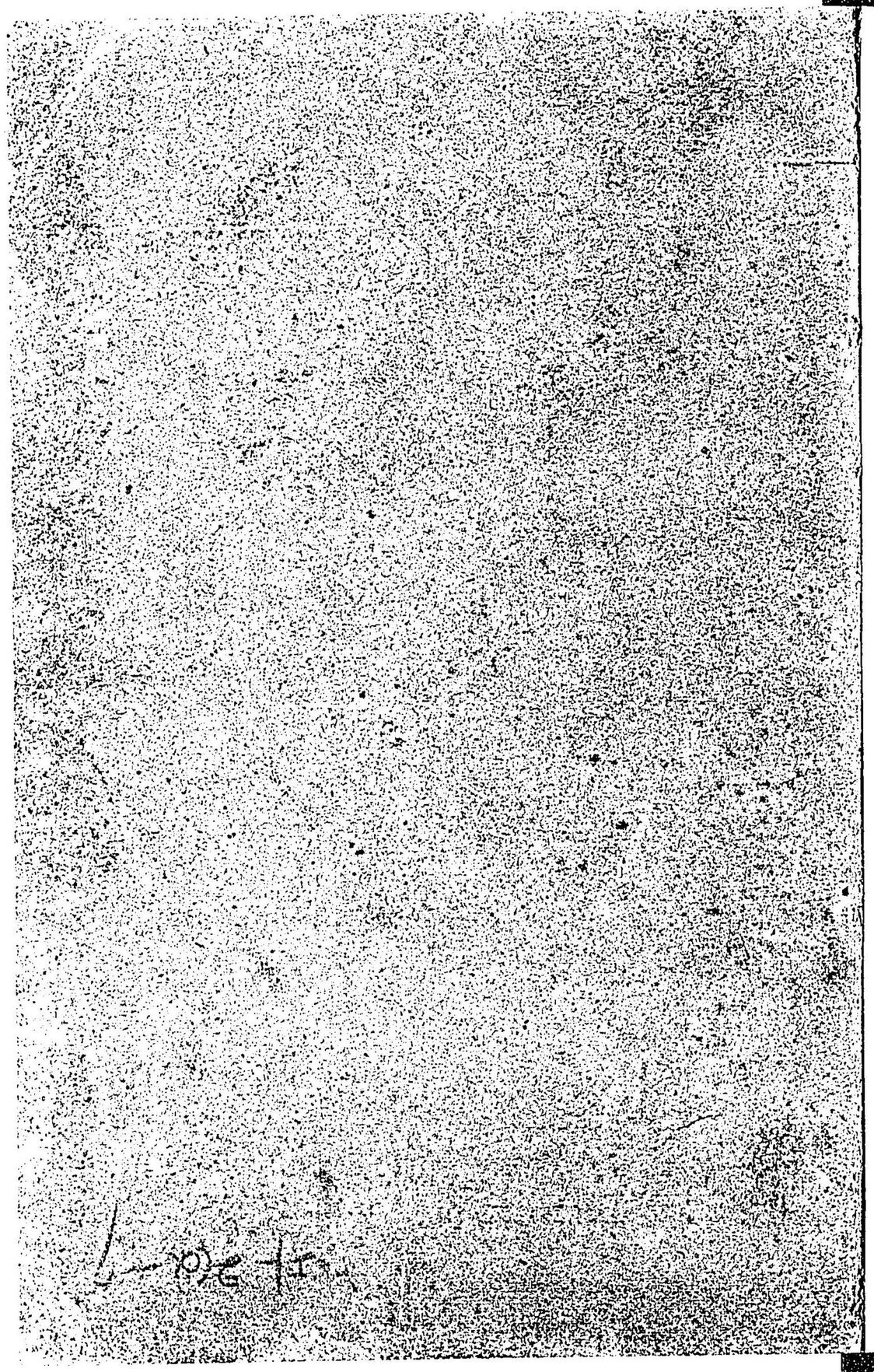
第拾七編 正七位內藤耻叟先生講述
墨子文中子講義 全壹冊

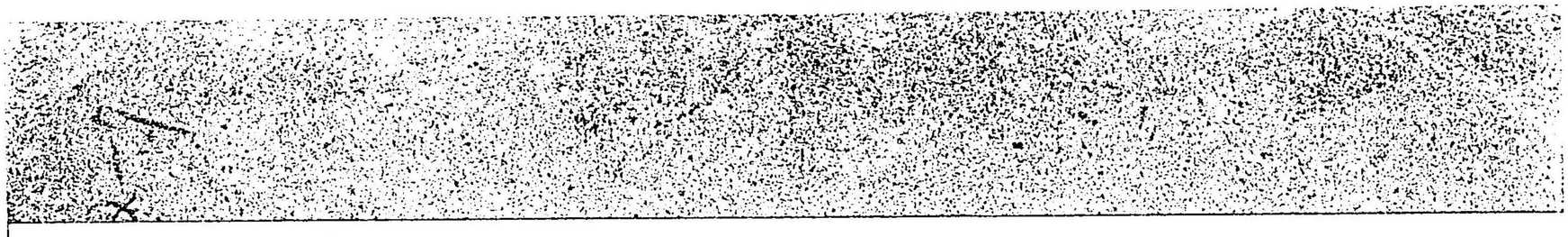
第拾八編 小宮山綏介先生講述
詩經講義 全壹冊

第拾九編 從七位城井悔庵先生講述
史記列傳講義 全三冊

第廿壹編 第廿貳編 第廿參編 第廿四編

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館





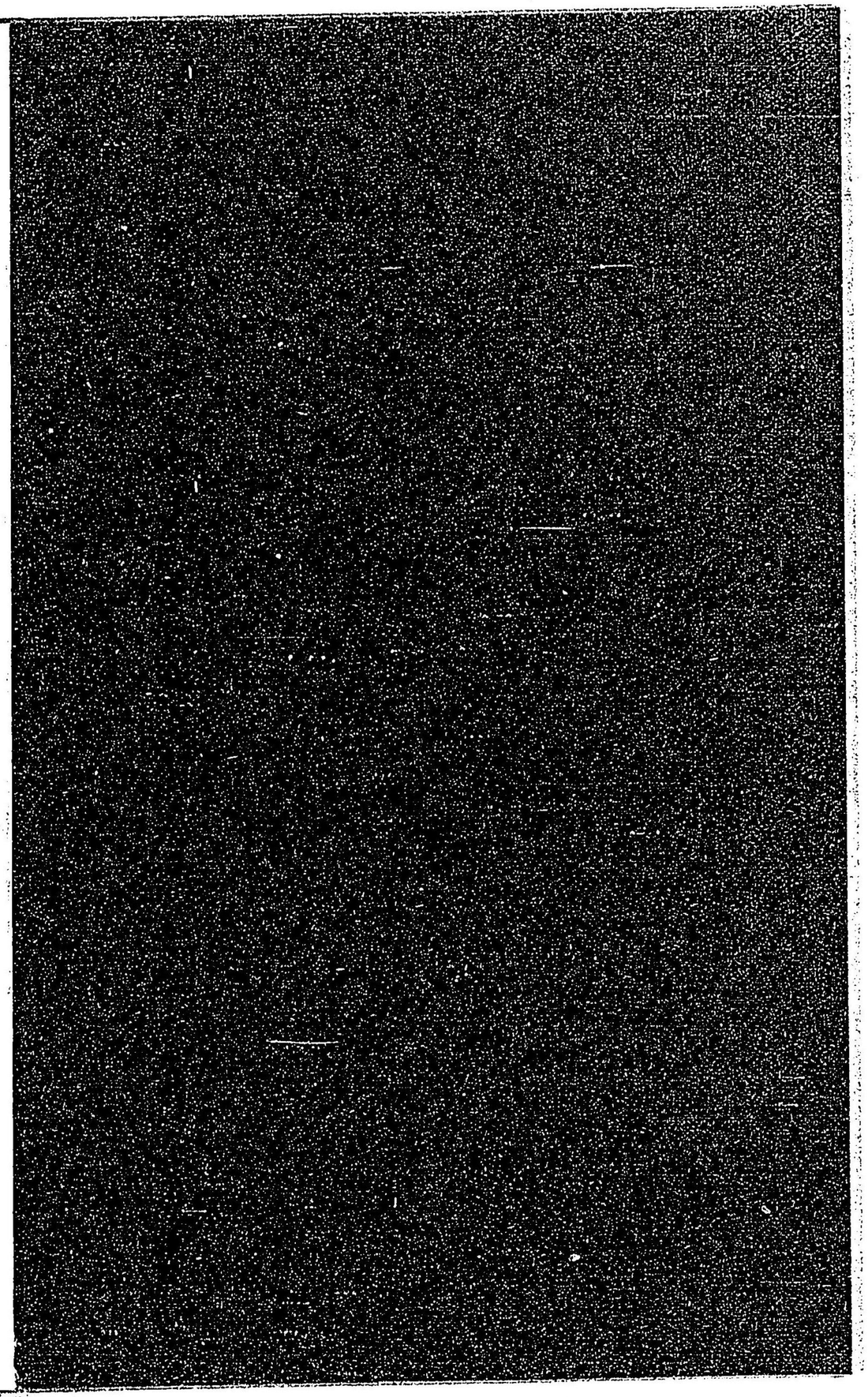
222.01
Ko547s

003088−000−9

222.01−Ko547s

支那学術史綱

国府　種徳、白河　次郎／著

M33

ACC−1097